

山王廃寺埋納坑から出土した塑像について

松田誠一郎（東京藝術大学美術学部教授・附属古美術研究施設長）

松田妙子（美術史家）

瀬山里志（美術史家）

前橋市教育委員会事務局文化財保護課

1 はじめに

1) 昭和・平成の発掘調査

前橋市總社町にある山王廃寺は、東国における初期の本格的寺院の代表的な存在である。これまでの調査で7世紀後半に創建され、寺域からは瓦をはじめ、全国有数の塔初層を飾った塔本塑像、宝相華文で飾られた飾り金具類、石製鷲尾や根巻石、塔心礎、礎石など豊富な石製品、縁軸陶器一括品、木製台座蓮弁、銅鏡、奈良三彩などの優品の出土が知られ、畿内の寺院と比較しても何ら遜色がないものとされている。

この山王廃寺を解明するため、昭和49年（1974）から昭和56年（1981）までの7次にわたり昭和の調査を実施した（＊1）。

この昭和の調査の大きな成果として「放光寺」銘瓦の発見があげられる。昭和54年（1979）の第6次調査で金堂基壇と塔基壇の間から「放光寺」とへラ書きされた瓦や「方光」の押印がある瓦が出土した。この発見から山王廃寺の寺号が「放光寺」であり、高崎市山名町にある辛巳歳＝天武天皇10年（681）の建碑とされる山上碑に刻まれる「放光寺」と東京国立博物館所蔵「九条家本延喜式」（国宝）の紙背文書である長元3年（1030）に草案された「上野国交替実録帳」の定額寺の項に記載された「放光寺」であるものと推測されている。

また、平成9年（1997）から平成11年（1999）までの3年間にわたり下水道設置工事に伴う立ち会い調査を行った（＊2）。この調査により塑像などが大量に納められた埋納坑や講堂跡が発見され、

山王廃寺の重要性が高まったため、史跡拡大の必要性から平成12年（2000）11月に山王廃寺等調査委員会を発足させた。この委員会指導のもとで、平成18年（2006）から平成22年（2010）までの5次にわたって平成の調査を実施した（＊3）。

これらの一連の発掘調査成果については、すでに刊行されている発掘調査報告書に譲りたい。

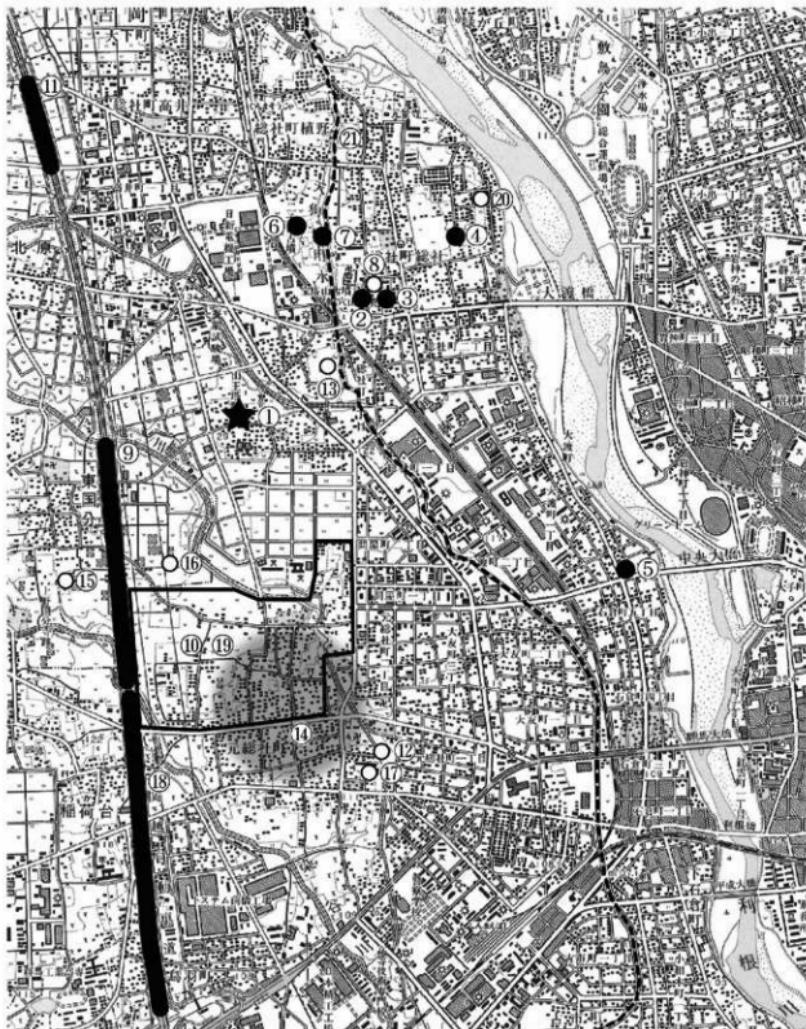
昭和から平成の3度にわたる調査によって主要堂塔は、塔を東、金堂を西に並列させ、その北に講堂を配し、回廊を巡らす法起寺様式の伽藍配置であることが判明した。さらに北方から僧坊もしくは食堂と思われる建物を確認し、伽藍の構造が明らかとなってきた。

山王廃寺が立地する總社町や隣接する元總社町、高崎市東国分町は地名が示すとおり律令制の国府や国分寺が置かれた地であり、まさに古代上野国の政治中枢地域である。總社古墳群内の宝塔山古墳や蛇穴山古墳と山王廃寺は同時期に造られ、両者には卓越した石材加工技術が認められる。山王廃寺の造営には、在地勢力としての總社古墳群を造営した豪族が深く関与していたことが推測されている。このように、古墳時代から奈良時代へと大きく歴史が変わろうとする過程の表舞台で山王廃寺は創建された。

2) 埋納坑の発見と調査

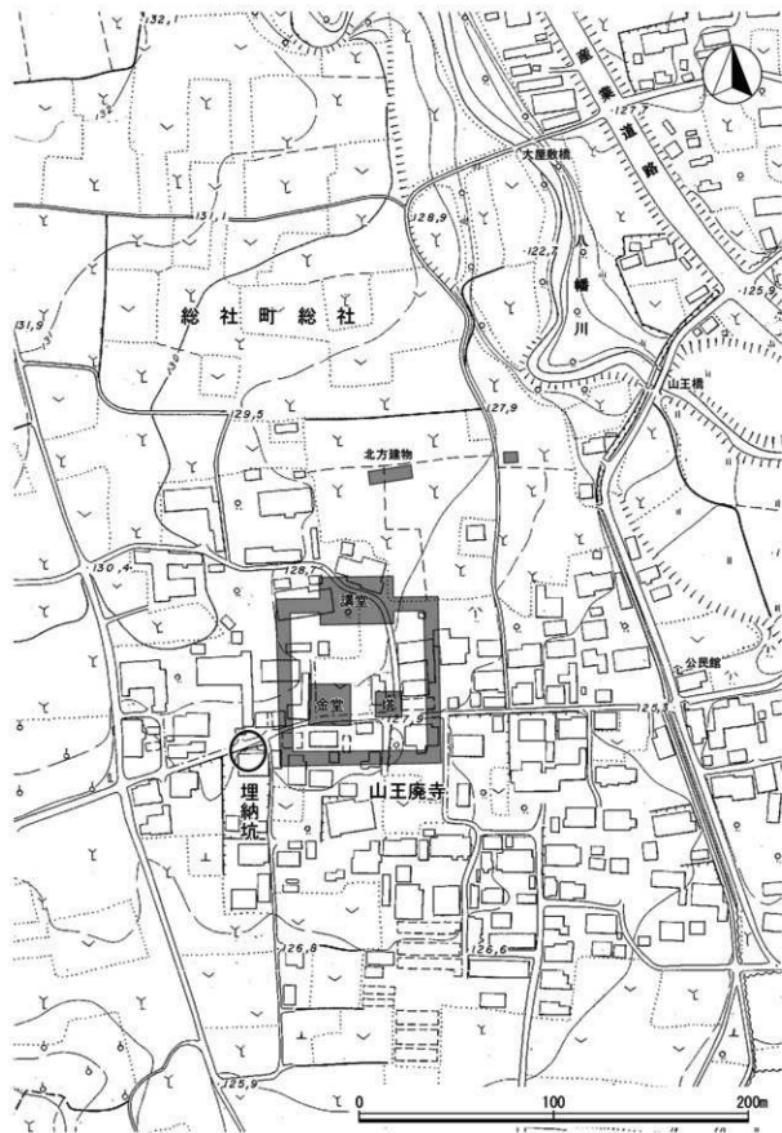
平成9年度調査

平成9年度に、山王廃寺周辺において下水道工



- ①山王庵寺 ②宝塔山古墳 ③蛇穴山古墳 ④遠見山古墳 ⑤王山古墳 ⑥總社二子山古墳 ⑦愛宕山古墳
⑧總社町屋敷南遺跡 ⑨上野国分僧寺・尼寺中間地城 ⑩元總社蒼海遺跡群 ⑪下東西遺跡
⑫元總社明神遺跡 ⑬大屋敷遺跡 ⑭上野国府 ⑮上野国分僧寺 ⑯上野国分尼寺
⑰元總社小学校校庭遺跡 ⑱鳥羽遺跡 ⑲蒼海城 ⑳總社城 ㉑天狗岩堰用水

第1図 山王庵寺と周辺の遺跡 (1/25,000)



第2図 山王庵寺の伽藍配置と埋納坑

事が行われたため、下水管設置工事の立ち会い調査を実施した。工事の順番として、はじめに重機で道路に幅約1m、深さ約2mの設置坑を掘削する。その際に掘削面の様子や遺物の有無を確認した。次に掘削が終了した段階で掘削坑の中に降りて、地層線引きをしながら遺構や遺物の有無を確認して、図面・写真の記録作成を行ったが、崩落の危険が伴うため許可された時間は数分であった。重要な遺構や遺物を検出した際には施工業者と逐次協議、検討していく方針で進行させた。

この立ち会い調査の中で、塔跡から西に60m、回廊の外郭線から西に10m地点で多量の瓦が発見された。この瓦発見地点の調査を施工業者に切に希望したが、受け入れてもらえたため、掘削にともなう発生土を施工業者に空き地まで運搬していただいた。この運搬した土を文化財保護課職員で仕分けた結果、多量の瓦片に混じて塑像の新発見となった。後日、さらに塑像片のほか壁材片、炭化物等をはじめ金属製品も包藏することから塔跡の焼失した品々を納めた「埋納坑」であることが判明した。

塑像は、昭和34年〔1959〕に地元の収集家により塔付近から1点の女性像頭部が採集されていた。しかし、それ以外は全く採集されていなかったため、この重要な発見は、研究者や美術史家の注目を集めると同時に全国に向けてその新発見の事実が報道された。このほか平成9年度の立ち会い調査は、講堂跡の新発見や金堂版築の検出など多大な成果をあげることができた。

平成11年度調査

平成11年〔1999〕度の調査は塔の南に走る東西の市道改良工事に伴う発掘調査で、埋納坑の解説を対象とした。調査区は、平成9年度調査区を挟んで、都丸保氏宅の敷地内に1・3トレンチ、道路敷に2トレンチを設定した。

その結果、埋納坑の範囲は東西方向で11.6m以上、南北方向で7.8m以上に及ぶことが確認できた。東西方向については、地層の堆積状態から延びてもあと僅かであるとみられる。南北方向はさ

らに南北ともかなり延びることが推測される。

1トレンチ

〔グリッド〕X130～X133、S84～S88

〔概要〕幅0.8～3m、長さ10.4m、深さ1.6m

〔内容〕4層目から焼土、炭化物が出土しはじめる。この層は西にいくにしたがって浅くなり、調査区の西側部分では浅間B軽石の純層の堆積が認められる。遺物包含層はほぼ80cmの厚さである。特に1トレンチの東側から中央にかけて瓦の堆積が顯著に見られ、ほとんど灰・炭化物と瓦だけが積み重なる状況であった。西半分は瓦に交じて塑像片や青銅製品片の緑青が多く含まれる。また、最下層は瓦の大型の破片が敷き詰めるような状態で出土した。

〔埋納坑の形成〕出土状態から、埋納坑の形成は、一度に行われた行為ではなく、大きく3層に分層できることから複数回の行為と思われる。特に、塑像片はややまとまりを見せることから、埋設行為は瓦に比べると特段に意識した可能性が考えられる。特に3個の塑像頭部片や複数の胸部破片が確認されたことが物語る。

〔その他の出土遺物〕瓦は創建期のものとみられるものも多少出土したが、ほとんどが9世紀頃の国分寺瓦や多くの文字瓦が出土していて、塔に使われた補修瓦と考えられる。

〔土器〕土師器、須恵器杯が見られるが、ともに10世紀のものである。特に須恵器杯の高台を逆三角形に貼り付け、口唇部を厚く外に折り曲げた技法の高足高台の古い段階と見られる。多用される日常雑器である酸化焰焼成の高台碗の出土は、埋納坑への形成時期を示すものと考えられる。

2トレンチ

〔グリッド〕X130～X132、S85

〔概要〕東西7m、南北0.7m、深さ1.6m。

〔内容〕東から西方向に向かって深くなる。4層目からが埋納坑の関連する層で、4層は焼土と炭化物が混じって出土する状況は1トレンチと共通する。遺物の出土は5層から瓦、塑像の小片、青銅製品片などが出土している。6層からは塑像片、

壁材片などの大型品、7層からはやはり大型瓦片が集中的に出土した。こうした出土状況は1トレンチと共に通している。

全体的に深さが1トレンチより浅くなる傾向が指摘できること、遺物のうち瓦の量が少ないと、壁材片の量が多いことなどが特徴的である。また、土器も10世紀後半のものが認められているほか、青銅製品の鋸びたものが多く含まれることが指摘される。穴の深さが1トレンチより浅くなっていることからも北限が近いと考えられる。

3 トレンチ

〔グリッド〕X130、S 87

〔概要〕東西2.3m、南北1.5m

〔内容〕3トレンチは西限を確認するために設定したトレンチで、西に行くに従ってやや浅くなる。瓦の堆積層も薄くなり、埋納坑西限が近いことが推察される。瓦、塑像片、壁片の出土量も極端に少なくなり、堆積層の厚さも40cmほどであり、西の底面は次第に上がっていくものと思われる。

3) 塑像報告書の刊行とその後の作業

この平成9年度と11年度に調査した埋納坑出土の塑像の報告については平成12年3月に松田誠一郎氏のご尽力で300頁を超える塑像の報告書（＊2）が既刊となっている。

その後、平成27年（2015）から令和3年（2021）にかけて、①主要塑像の図化作業、②主要な塑像の写真撮影、③九州国立博物館でX線CTを使用し立体形状の認識、内部の構造を調査し制作方法を検証する研究を行った（＊4）。さらにCTデータから3Dプリンターに出力し、微細な顔の表情

を山崎隆之氏が彫刻で再現させるなど塑像を巡る分析作業を実施した（＊5）。その中で今回は、塑像の図化作業の成果を公表するものである。（文化財保護課）

【註】

* 1. 前橋市教育委員会編集・発行

『山王庵寺跡・第2次発掘調査概報』昭和51年（1976）3月

『山王庵寺跡・第3次発掘調査概報』昭和52年（1977）3月

『山王庵寺跡・第4次発掘調査概報』昭和53年（1978）3月

『山王庵寺跡・第5次発掘調査概報』昭和54年（1979）3月

『山王庵寺跡・第6次発掘調査概報』昭和55年（1980）3月

『山王庵寺跡・第7次発掘調査概報』昭和57年（1982）3月

* 2. 松田誠一郎氏ほか『山王庵寺・山王庵等Ⅴ遺跡発掘調査報告書』前橋市理藏文化財発掘調査団、平成12年（2000）3月

* 3. 前橋市教育委員会編集・発行

『山王庵寺・平成18年度調査報告』平成19年（2007）7月

『山王庵寺・平成19年度調査報告』平成21年（2009）2月

『山王庵寺・平成20年度調査報告』平成22年（2010）2月

『山王庵寺・平成21年度調査報告』平成23年（2011）2月

『山王庵寺・平成22年度調査報告』平成24年（2012）2月

* 4. 今津謙生・赤田昌倫「九州国立博物館10周年記念シンポジウム X線CTを用いた文化財の活用と研究」九州国立博物館 博物館科学課、2015年12月。「山王庵寺跡塑像復元プロジェクト事業について」『年報』第46集、前橋市教育委員会、2016年3月。九州国立博物館での塑像復元プロジェクトは、松田誠一郎氏と山崎隆之氏（愛知県立芸術大学名誉教授）の発案により実行された。

スタッフは、松田氏、山崎氏のほか九州国立博物館の今津謙生氏、赤田昌倫氏、田中麻実氏、前橋市教育委員会事務局文化財保護課職員で構成された。

* 5. 山崎隆之氏によって再現された塑像は、前橋市立総社歴史資料館に展示されている。

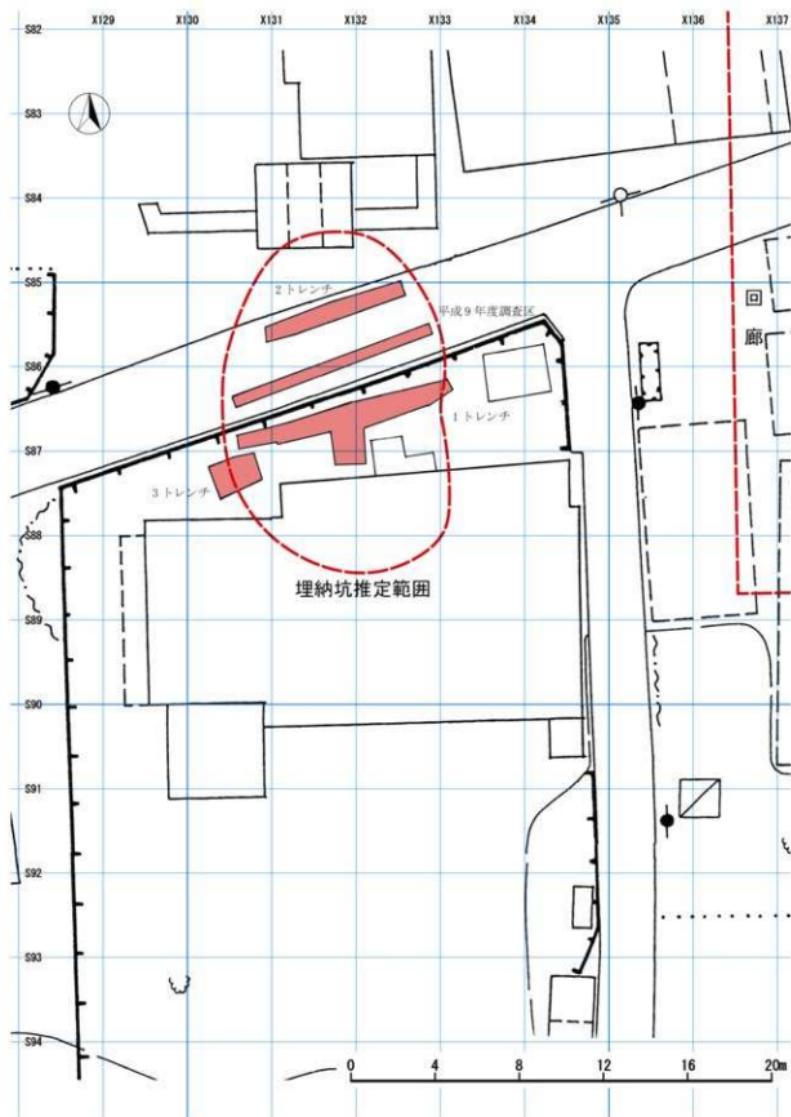
2 埋納坑出土遺物の概要

1) 種類と点数

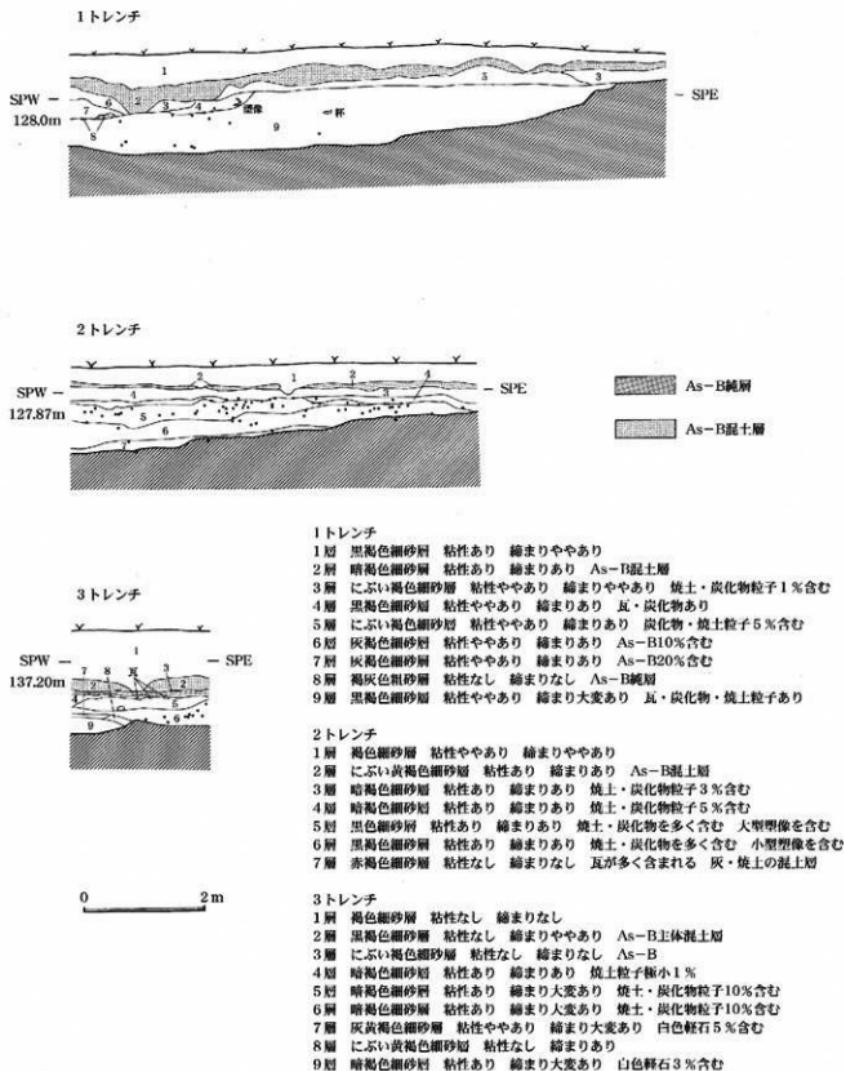
平成9年と11年の両年度に山王庵寺埋納坑より出土した遺物の点数は、表1のとおりである。総点数のうち約7割は塑像片で占められ、残りの大部分

は壁体で、そのほか若干の金属製品などが含まれる。

塑像片は、仏像をはじめとする人物像・動物などと山岳・礎形の2種に大別されるが、数量的には、塑像片の総点数の9割以上を山岳・礎形が占める。



第3図 埋納坑と平成9・11年度のトレンチ配置図



第4図 平成11年度1～3トレンチセクション図

像の表面には彩色仕上げの痕跡が残るものが多く、一部の断片には金箔押しや彩色文様・切金文様の痕跡も残る。壁体には、彩画の痕跡をとどめるものも含まれるが、構図やモチーフなどは判別できない。金属製品のうちには、小仏像の台座、風鐸の残欠が含まれている。

遺物はいずれも火中している。塑像の多くは素焼き状になり、塑土に混ぜられたスサや心木はほとんど焼失している。また、人物像のうちには、高温のために顔料を塗った像の表面が沸騰し、気泡を生じているものもみられる。

2) 像の種類と大きさ

塑像は大別して人物・動物などの像、器物、雲、山岳・礫形などに大別される。

人物像としては、如来・菩薩・神将の仏教尊像のほか、裸形および袈裟を着けた羅漢像、邪鬼とみられる裸形像、婦女や胡装の俗人像などがある。それらの中には、原初像の像高が推定できるものがある(表2)。仏・菩薩・天の諸像は、2尺以上の像高であったと推定できる。最大は如来像または菩薩像で、像高3尺ほどである。比丘像は、これらの尊像に比べるとやや小さめで、像高は2尺未満と推定される。

女性や胡人など供養者とみられる諸像は、いずれも比丘像以下の大きさで、1尺以上、2尺未満の像高と推定される。

動物としては、猪の頭部のほか、駒の前脚部とみられる断片が出土している。

器物としては、垂幕風の彩色文様のある箱形天蓋とみられる断片や、箱形の器物とみられる、金箔を押した稜角のある断片などが出土している。

雲については、巻き込みのある飛雲頭部のほか、金箔地に顔料で縞模様を描いた飛雲脚部などが出土している。特に雲脚については、表面から裏面にかけて仕上面が回り込んでいる断片があり、群像の安置空間の問題を考える上で興味深い。

山岳・礫形(*)については、前後に山襞を重ねた細長い山頂部、テーブル状の平らな上面をもつ礫形、水平方向の層理やくぼみをあらわした崖、斜面の一部などがある。これらは、群像を安置する空間を形づくっていたとみられる。(松田誠一郎)

【註】

*この報告書では、群像の安置空間を形づくったとみられる断片のうち、尖った頂上部をもつ山岳と断定できる断片以外のものは、すべて礫形と総称した。

3 山王庵寺出土の塑像について

1) 塑像の概要と製作年代

山王庵寺塑像片の概要是、以下のようにまとめることができる。その製作年代は、神将像の甲制、仏像の作風、彩色文様の特徴などから、8世紀前半、およそ730年前後と考えられる。

①山王庵寺出土の塑像は、7~8世紀の中央における作例と共に通ずる、本格的な製作技法を用いて製作されている。

②心木には広葉樹環孔材を用いるものがあり、その用材は現地で調達したものと推定される。

③製作はきわめて丁寧で、仕上げには縦縄彩色や切金文様を用いる。

④塑像片は、山岳をともなう塔本塑像の一部とみられる。

⑤塔本塑像を安置する須弥壇は、1辺長12~13.5尺(357.6~402.3cm)程度の大きさであったと推定される。

⑥その主題は、仏伝中の降魔成道・涅槃の両場面ほか、説法の場面があったと推定され、法隆寺や薬師寺の塔本塑像と類似した場面選択をしていったとみられる。

⑦群像のうちには像高70cm前後の神将立像が少なくとも5体あり、その造形や主題との関係から、八部衆像の存在が推定される。

表1 遺物の種類と出土点数

遺物の種類	総数(割合%)	内訳(割合%)	平成9年度 出土分	平成11年度 出土分
塑像片	2,203 (69.6)	2,203 (100.0)	245	1,958
人物・動物など		137 (6.2)	31	106
山岳・機形		2,066 (93.8)	214	1,852
壁体片	936 (29.6)		73	863
金具製品	21 (0.7)		18	3
不明	3 (0.1)		0	3
合 計	3,163 (100.0)		336	2,827

表2 人物像の大きさ

※「No.」の後の番号は、作品解説の番号である。

「推定像高」の項の「立像」「坐像」は、それぞれ「立像として」、「坐像として」の意味である。

No.	断 片	姿勢	推定像高(cm)
1	菩薩像腹部 9A80336	不明	60- 70 [立像]
2	菩薩像または天部像垂巻 11A962718	不明	60- 70 [立像]
4	如来像または菩薩像膝部 11A962670	倚像	70- 80
5	如来像または菩薩像左脚部 11A962764	立像?	90-100 [立像]
6	神将像頭部 11A962820	不明	60- 70 [立像]
7	神将像右半身 11A962825	不明	60- 70 [立像]
8	神将像右肩・右上腕部 11A962749	不明	60- 70 [立像]
9	神将像左肩・左胸部 11A962761	不明	60- 70 [立像]
10	神将像背面左肩部 11A962748	不明	60- 70 [立像]
12	神将像肩甲・鱗袖 11A962713	不明	60- 70 [立像]
14	神将像右脚部 11A962731 (2片)	不明	60- 70 [立像]
15	神将像左脚部 11A962754	不明	60- 70 [立像]
17	神将像腹部 11A962753	不明	70- 80 [立像]
18	神将像下腹部 11A962810	立像	60- 70
19	神将像下腹部 11A96369+11A962755	立像	60- 70
20	神将像右腰部 11A962702	立像	60- 70
23	神将像右前腕部 11A962756	不明	60- 70 [立像]
24	神将像左前腕部 11A962762	不明	60- 70 [立像]
31	比丘像上半身 9A80335	不明	45- 55 [立像]
32	比丘像左肩・左上腕部 11A962824	不明	45- 55 [立像]
33	女性像頭部 11A962821	不明	20- 25 [坐像]
34	女性像面部 11A962822	不明	-25- [坐像]
35	女性像胸部 11A962763	不明	20- 25 [坐像]
36	女性像上背部・左上腕部 11A962765	不明	20- 25 [坐像]
37	胡人像上半身 11A962823	不明	-30- [立像]

⑧神将像の甲制には、730 年代の作例にはじめてあらわれ、その後、日本の神将像の基本甲制として長く定着した《天平甲制》が採用される。

⑨甲制の細部形式は、天平 6 年〔734〕の興福寺八部衆立像の甲制に最も近く、神将像の服制にも、8 世紀第 2 四半期の作例に共通する特徴が確認できる。

⑩痕跡からうかがわれる菩薩像の胸飾の形式も、8 世紀前半に位置づけて矛盾がない。

⑪作風については、和銅 4 年〔711〕の法隆寺塔本塑像から、740 年代の東大寺法華堂・戒壇堂の塑像・乾漆像へと至る、写実様式の展開過程に位置づけることができる。とりわけ充実した肉身の表現には、薬師寺塔本塑像や興福寺八部衆立像より進んだ面がみられる。

⑫彩色文様にも、8 世紀前半の特徴がみられる。特に C 字形を用いる团花文の形態は、興福寺八部衆立像のそれに近く、この点からは 720 年代から 730 年代前半の製作と考えることが可能である。

塑像は重量が重く、材質的にも脆弱なため、製作後の移動が困難である。山王庵寺塑像の製作も、現地で行われたと考えられる。塑像の心木に中央ではありません用いられない広葉樹環孔材を用いている点も、そのことを傍証する。

他方、造形的な検討を通して明らかのように、山王庵寺の塑像は、中央の作例である法隆寺塔本塑像や薬師寺塔本塑像と比較しても、全く遜色のないすぐれた作行きを示す。その高い製作水準から、作者は中央から派遣された官営工房系の仏工と考えられる。したがって、その造像には中央における造形・技法の展開が、ほぼリアルタイムで反映されているとみてよからう。こうしたことを前提として、これまでの検討結果を総合的に判断すれば、山王庵寺塑像の製作年代は、8 世紀第 2 四半期、おおむね 730 年前後に求めることができよう。

2) 塔の根巻石と塑像との関係

塔本塑像とみられる山王庵寺塑像の製作年代を 730 年前後と考えると、7 世紀第 3 四半期とされる伽

藍の創建から、半世紀以上遅れて塔本塑像が造られたことになる。

塔の創建に遅れて、塔内に安置する仏像が造立された事例は、藤原氏の氏寺である興福寺にみられる。『興福寺流記』所引の「天平記」によれば、同寺五重塔は天平 2 年〔730〕に光明皇后により創建された。その安置仏像について、『興福寺流記』は「天平記不注所安仏等」（天平記は安ずる所の仏等を注さず）とし、「宝字記」を引いて初層に安置された四方四仏浄土の詳細を記載する。つまり、同塔の安置仏像は、「天平記」の勘録された天平 16 年〔744〕以後、「宝字記」の勘録された天平宝字年間〔757～765〕以前に造立されたと考えられる。塔は本来、仏舍利を安置するための施設で、仏像を安置する必要はない。したがって、塔内に安置される仏像の造立が、仏舍利の納置や塔建物の造営に遅れて行われたとしても問題はない。

塔初層の心柱の周囲に置かれたと推測される根巻石は、塔本塑像の安置を前提としたものとは考えにくい。創建期のものとみられる根巻石の存在は、当初、山王庵寺の塔内に塑像群を安置する計画がなかったことを立証するものといえよう。

ところで、8 世紀第 2 四半期において山王庵寺の塔内に、山岳をともなう塑像群があらためて製作された理由は明確ではない。畿内における塔内安置の山岳像や群像の例としては、7 世紀のものに、大化 2 年〔646〕の四天王寺塔の靈鷲山像および四天王像があり、7 世紀末から 8 世紀初めにかけての製作とみられるものに、川原寺の塔本塑像（川原寺裏山遺跡出土）がある。8 世紀になると、仏堂内に淨土変を立体であらわすことが盛んになったが（＊1）、これと対応するように、仏伝や仏教説話を主題とする塔本群像の造立も一段と盛んになった。和銅 4 年〔711〕の法隆寺塔本塑像、天平 2 年〔730〕頃の薬師寺東西塔本塑像のほか、滋賀県雪野庵寺出土の塔本塑像も 8 世紀前半の製作とみられ（＊2）、これらに遅れて、8 世紀中頃には興福寺塔の四方四仏浄土像が造立され、8 世紀後半には元興寺塔に山岳をともなう四方

四仏淨土像が造立された。このような畿内における塔本群像造立の趨勢からみれば、8世紀第2四半期における山王庵寺の塔内蔵巣も、こうした畿内寺院における塔本塑像の流行を背景にしたものと考えることができよう。

山王庵寺の塔本塑像の造立に関して、もうひとつ思い合わされることは、法隆寺五重塔の心柱朽損にともなう修理と、須弥壇改変のことである。法隆寺五重塔の八角形の心柱は、下部を約10尺ほど地下に埋めるが、塔の創建後まもなく、その地表近くの部分が腐朽はじめた。そのため、心柱中心部を残して腐朽部が除去され、その四周より凝灰岩の切石や自然石を挿入して補強された。この補強工事に関連して創建時（第1次）の須弥山像や須弥壇も改変拡大されたらしく、第2次須弥壇の日干しレンガは、この補強用の切石にかかって築かれている（＊3）。

山王庵寺の塔も、心礎南側の地層断面で心礎上面より上方30cmまで版築の跡が残り、心礎が地下式であったことが確認されている（＊4）。基壇の上面は確認できず、基壇上面から心礎上面までの深さも正確にはわからない。しかし、心礎が地下式ないし半地下式であれば、創建後50年ほどで心柱の地下部分が腐朽することはおこり得る。想像をたくましくすれば、法隆寺五重塔と同じような事情で、心柱に対する補強工事が必要となり、これに関連して須弥

壇の改変や塔本塑像の製作が行われたとも考えられる。（松田誠一郎）

【註】

*1. たとえば、平城遷都後に造営された興福寺では、養老5年（721）8月の藤原不比等の一周年忌には、中金堂の弥勒淨土像（橘三千代発願）と北円堂の弥勒三尊像・羅漢像2軀・四天王像からなる群像（元明天皇・元正天皇発願、長屋王造立）が供養された。天平6年（734）の橘三千代の一周年には、西金堂の釈迦薬師会像（光明皇后発願）が供養された（※1）。また、大安寺では、天平14年（742）に、丈六釈迦如来像を本尊とする金堂に、菩薩像2軀・羅漢像10軀・八部衆像が追加して造立され、興福寺西金堂と類似した構成をもつ釈迦薬師会像が完成した（※2）。

※1. 『興福寺流記』。※2. 『大安寺伽藍縦井流記資財帳』。

*2. 日本古文化研究所編『日本古文化研究所報告第七 雪野寺跡発掘調査報告』、1937年11月、日本古文化研究所。雪野寺出土の塑像片のうちには、《天平甲制》を採用した神持像の断片が含まれ、少なくともこの神持像に関しては、製作年代の上限を730年頃と考えることができる。そのほかの菩薩像なども、作風より奈良時代前期・8世紀前半の製作と思われる。

*3. 法隆寺編『法隆寺重要文化財塑造金剛力士立像修理工事報告書』（1965年3月、法隆寺発行）、127ページ。西川新次『法隆寺五重塔の塑像』（1966年7月、二玄社）、152～153ページ。

*4. 前橋市教育委員会『山王庵寺跡第4次発掘調査概報』、1978年3月、前橋市教育委員会、55ページ。

4 塑像解説

1 菩薩像胸部

〔遺物番号〕9A80・336 第5図

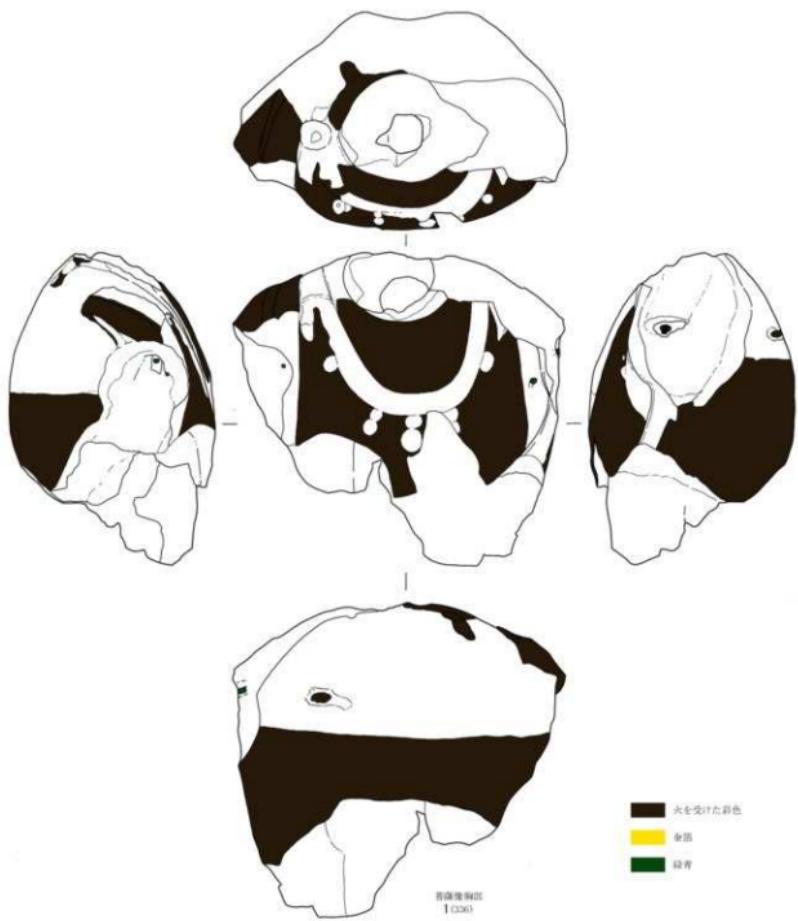
〔法量〕全高12.2cm 最大張13.7cm

胸幅12.6cm 胸奥（左）9.1cm

胸奥（右）8.1cm

〔形状〕腹部左側を含む、三道下端より下の菩薩像の胸部。両腕は付根より欠失する。原初像の像高は、立像として60～70cmと推定される。背面より両肩にかかる天衣（過半亡失）と胸飾（亡失）をつける。

胸飾の意匠は、痕跡より次のことが判る。基本帶の幅は0.8cm前後。その下縁中央の3箇所より各上下2個ずつの垂飾（上方は円形、下方は縦長梢円形、中央分が左右分より大きい）を下げ、下縁左右に各1個の横長梢円形の飾をつける。基本帶の右端部には、円形の飾（菊座か）をつけ、その後より短いリボンを垂らす。同左端部にはリボンの痕跡のみ残る。（「左右」は、特に断わらない限り、「像にとっての左右」の意味で用いる。以下、同じ）左胸下から左



第5図 山王庵寺の塑像（菩薩像、天部像）

腋下にかけて、胸部と腹部の境をあらわす刻線をいれる。背筋のくぼみをあらわす。上半身の軸線がやや右に傾く。もと三尊像の右脇侍菩薩像であった可能性がある。

〔構造〕心木は焼失し、像内中央に縦に孔が貫通する。塑土は下土・中土・仕上土の順に盛る。下土は小石混じりの粗い土で、スサとして切藁を大量に混ぜた痕跡がある。中土は下土より粒子の細かい土で、砂粒が多く混じる。スサとして細かい植物繊維と切藁を混ぜた痕跡がある。仕上土は篠（ふるい）にかけた粒子の細かい土で、スサの痕跡は肉眼では確認できない。製作工程は、まず心木の周りに下土を軽くつけ、次に中土を厚めに盛って像の概形を塑形し、最後に仕上土を0.4~1.0cmほどの厚みにかける。両腕の付け根には、銅線の心（0.3cm×0.3cm）がわずかに残る。また、天衣の左右縁近くにも、彫刻面に対して直角に近い角度で打ち込まれた短い銅線（0.1cm×0.1cm）が残る。これは、ここから下方に垂れる天衣遊離部の銅心の末端とみられる。両肩にかかる天衣や胸飾は、肉身部を塑形した後、別に作ったものを貼り付けていたが、現在そのほとんどを失する。右肩上および背面頸部右後方に残る別製の天衣は、篠にかけた粒子の細かい土で作られており、その厚みは0.1cmほどである。

表面はもと彩色仕上げ。顔料は高熱のために変質するが、肉身部には赤褐色を呈する粒子の粗い顔料が、天衣には暗緑色を呈する粒子の粗い顔料がそれぞれ残存する。別製の天衣や胸飾の剥落した部分は仕上土の表面を露出する。その背面の天衣下縁近くや左右胸脇の天衣内縁近くには、縁に沿って黒褐色を呈する厚みの少ない太い描線が断続的に残存する。この描線は、天衣の貼り付け位置を示した下当たり線の可能性がある。

〔備考〕この像は、正中線を境にして左側の面の方が右側の面よりも横幅が狭く、面の曲率が大きい。胸飾の曲線も左右非対称であり、左側の方が右側よりも曲率が大きい。その造形は、正面からみると、像に向かって右斜め前方からみる方がより自然

にみえる。鑑賞者の視点を意識した、浮彫的な表現が用いられていると考えられる。

同様の表現は、法隆寺五重塔東面の文殊菩薩・維摩詰像（和銅4年〔711〕）や法隆寺食堂旧在の梵天・帝釈天像にもみられることが指摘されている（＊）。すなわち、斜め前方からの鑑賞が意識されたこれらの像では、立体をより効果的にみせるため、鑑賞者に近い側の面が反対側の面よりも厚くモデリングされている（=面の曲率が大きい）という。本像のモデリングの左右の違いは、法隆寺五重塔の文殊像や法隆寺食堂の梵天像頭部のそれと共通している。前者は塔初層東面の左側（北側）に右斜め向きに安置され、後者は通常主尊の左側に安置される。これらの例を参考にすれば、本像は当初の安置空間の左側に右斜め向きに置かれていた可能性が考えられる。ただしこの想定は、ポーズの問題から本像を右脇侍像とみる見方とは相容れない。その当初の安置法については、今後の検討を俟ちたい。（松田誠一郎）
＊西川杏太郎「梵天立像 帝釈天立像」（『奈良六大事大觀 第3巻 法隆寺3』）、1969年11月、岩波書店。後に「法隆寺食堂の塑像 二 梵天立像・帝釈天立像」と改題して、同『日本彫刻史論集』（2000年1月、中央公論美術出版）所収。

2 菩薩像または天部像垂髻

〔遺物番号〕11A96・2718 第5図

〔法量〕全高4.3cm 最大張4.7cm 最大奥3.7cm
〔形状〕菩薩像または天部像の頭上に結い上げた垂髻。原初像の像高は、立像として60~70cmと推定される。髪はすべて毛筋彫り。髻（もどり）の根幹部には、斜めに毛筋彫りを施した元結（あるいは束髪）を隙間なく4段に巻く。元結の毛筋彫りは段ごとに向きを変え、全体として矢羽根文風にまとめる。頂上部から左右側面にかけては、同心円状に整えられた輪状の束髪（左右とも各4束）を垂らす。
〔構造〕内部中央やや右後方寄りに孔があく。孔の内面には、縦に細かい平行線状の痕が残り、心木が当たっていたことが確認できる。塑土は下土・中土・

仕上土の順に盛る。下土には、スサとして切藁を混ぜた痕跡が残る。

〔備考〕垂髪は、薬師寺西塔跡出土塑像片（天平2年〔730〕頃）、興福寺田西金堂八部衆像（天平6年〔734〕）のうち阿修羅・畢婆迦羅・緊那羅の各像、唐招提寺伝衆魔王菩薩像・伝獅子吼菩薩像、香川県願興寺聖觀音像、岡寺如意輪觀音像、秋篠寺伝伎芸天像・伝梵天像など、8世紀第2四半期以後の菩薩像・天部像にみられる。そのうち、興福寺八部衆像の垂髪は、ふくらみの少ない三角状の硬い輪郭をもち、この断片とよく似た造形感覚を示す。（松田誠一郎）

3 菩薩像または天部像

〔遺物番号〕11A96・2719 第5図

〔法量〕全高3.6cm 最大張4.1cm 厚1.1cm

〔形状〕左側面の一部を含む髪の正面部分で、縱方向の束髪5束分が確認される。髪は毛筋彫り。

〔構造〕塑土は下土・中土・仕上土の3層が残る。下土にはスサとして切藁を多く混ぜた痕跡があり、現在炭化して黒ずむ。表面は摩滅が進むが、毛筋彫りがよく残る左方部には、高熱で褐色に変色した顔料が残存する。（松田誠一郎）

4 如来倚像または菩薩倚像膝部

〔遺物番号〕11A96・2670 第6図

〔法量〕全高11.6cm 最大張9.1cm 最大奥5.9cm

〔形状〕台座に腰掛けて坐る、如來像または菩薩像の衣に蔽われた膝から脛上部にかけての部分。原初像の像高は、倚像として70~80cm前後（頭頂より足先まで）と推定される。

〔構造〕塑土は、仕上土と中土が残る。中土には、細かい植物纖維のスサの痕跡が認められる。中土層には厚みがあり、2~3層に分けて盛られる。下土層に接していたとみられるその内面は、浅く皿状にくぼむ。表面には、比較的粒子の細かい顔料が一面に塗られる。顔料は高熱のために変質し、現在、濃い黒褐色を呈する。

〔備考〕山王庵寺出土塑像片のうち最大級の像の断片で、原初像の像高は法隆寺五重塔南面の弥勒如来倚像（南1号、像高81.0cm）に近い。塔初層4面のうち、いずれかの面の主尊像と推定される。像種について、倚像の形式や法隆寺・薬師寺の塔本塑像の主題構成からみて、釈迦如来もしくは弥勒如来に当る可能性が高い。（松田誠一郎）

5 如來像または菩薩像左脚部

〔遺物番号〕11A96・2764 第6図

〔法量〕全高15.8cm 最大張8.7cm 最大奥6.8cm

〔形状〕如來像または菩薩像の片脚の膝から脛半ばにかけての部分で、膝下の衣文線3本を含む。脚の左右端での衣文線の間隔の違いや面の曲がり方からみて、左脚部とみられる。原初像の像高は、立像として90~100cm程度と推定される。最上段の衣文線は、膝の外側で消える。

〔構造〕塑土は下土・中土・仕上土が残る。下土には切藁のスサ（一部残存）が多く混じる。中土には細かい繊維のスサを混ぜた痕跡がある。中土は1.2cm前後の厚みに盛られ、仕上土は0.3cm前後の厚みに盛られる。表面には、現在黒色を呈する粒子の細かい顔料が一面に塗られる。

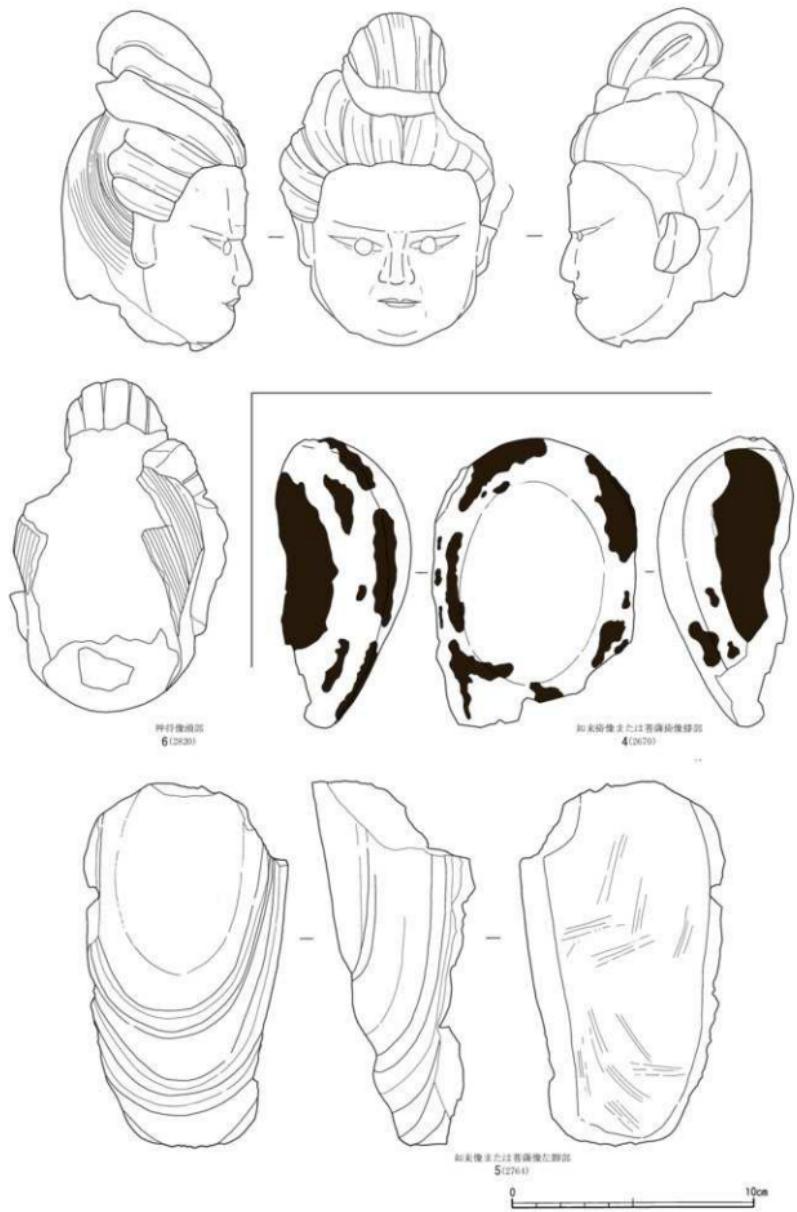
〔備考〕如來倚像または菩薩倚像膝部（11A96・2670、No.4=以下、番号のみを記す）とともに、山王庵寺出土塑像片のうち、最大級の像の断片である。塔初層4面のうち、いずれかの面の主尊像であったとみられる。その原初像の推定像高は、法隆寺五重塔北面の涅槃釈迦如來像（北1号、像高99.5cm）に近い。造形的には立像・涅槃像双方の可能性があるが、大きさの面では、塔本塑像の立像としては大き過ぎるくらいがあり、涅槃像とみる方が自然である。（松田誠一郎）

6 神将像頭部

〔遺物番号〕11A96・2820 第6図

〔法量〕全高13.2cm 髮頂-頸13.1cm

頭頂-頸8.5cm 面長6.9cm



第6図 山王庵寺の塑像（神符像、如来像または菩薩像）

面幅 6.9cm 耳張 7.9cm

面奥 7.5cm (後頭部の仕上土層を失う)

〔形状〕髪頂より頸部上端までを含む神将像の頭部。原初像の像高は、立像として 60~70cm と推定される。頭髪は、地髪部両耳後ろ辺に残る当初の仕上面では、束ね目をあらわした上、毛筋彫りを施す。もとは、頭髪部全体が同様の仕上げであったとみられる。地髪部は正中線で左右に振り分け、頭頂に向かって梳(す)き上げる。頭頂に集められた髪を元結紐 1 条で束ね、髪を結い上げる。髪は束髪 5 を左右に並列する。側面からみると、髪は全体に少し後ろに傾き、両端の束髪が輪状にあらわされる。右こめかみ辺より右耳前にかけて、5 条の焰髪をあらわす(左焰髪のすべて、右焰髪の上から 1 条目より 4 条目までの先端部、各欠失)。焰髪の下端は、右耳上部を覆う。眉根を寄せ、両目を瞑(いか)らせる。眼瞼裂は、目頭の部分が縦に裂ける。口唇の輪郭は、表面の荒れが甚だしく確認できないが、口の縫みは表されておらず、もと口を閉じていたとみられる。

〔構造〕心木は焼失し、像内中央には縦に孔(径 2.4cm)があく。心木には藁を螺旋状に巻いていたらしく、孔の内面にその痕跡が残る。塑土は下土・中土・仕上土の順に盛る。下土は小石混じりの粗い土で、スサとして切藁を多く混ぜた痕跡がある。土の盛りは比較的少ない。中土は下土よりやや粒子の細かい土で、断面には多数の細かい孔が確認できる。地髪部左側の中土露出部でみると、切藁と屈曲した細かい繊維の両方の痕跡が確認できる。また、中土段階で髪際の立ち上がりをあらわしていたことが判る。仕上土は細かい篩土で、肉眼ではスサの痕跡を確認できない。髪基部および地髪部の左側面から背面にかけての部分は、仕上土層を大きく失い、中土層を露出する。断面が確認できる地髪部や頸部上端辺では、仕上土層の厚みは 0.2~0.5cm 程度である。また、地髪部左側の中土露出部でみると、焰髪や左耳は中土では塑形されておらず、すべて仕上土で塑形していたとみられる。塑土には各層とも雲母が混じる。

両目の黒目の部分は、別に作った球状のものを嵌め込んでいたが、現在亡失して丸い孔となる。孔の大きさは、左目で直径 0.7cm、深さ 0.8cm。表面は、頭髪部・肉身部とも粒子のあらい顔料が一面に塗られる。いずれも熱変し、光沢のある黒色を呈し、激しく発泡する。

〔備考〕顎の先端が尖り、下顎の奥が左右に張り出した面長な顔だちは、東京国立博物館保管の木造伎楽面のうち金剛面・力士面(法隆寺献納宝物第 212・213・227 号)とよく似ている。なお、推定立像高 60~70cm の神将像の断片は、この頭部をはじめとして、多数出土する(6~30)。(松田誠一郎)

7 神将像右上半身

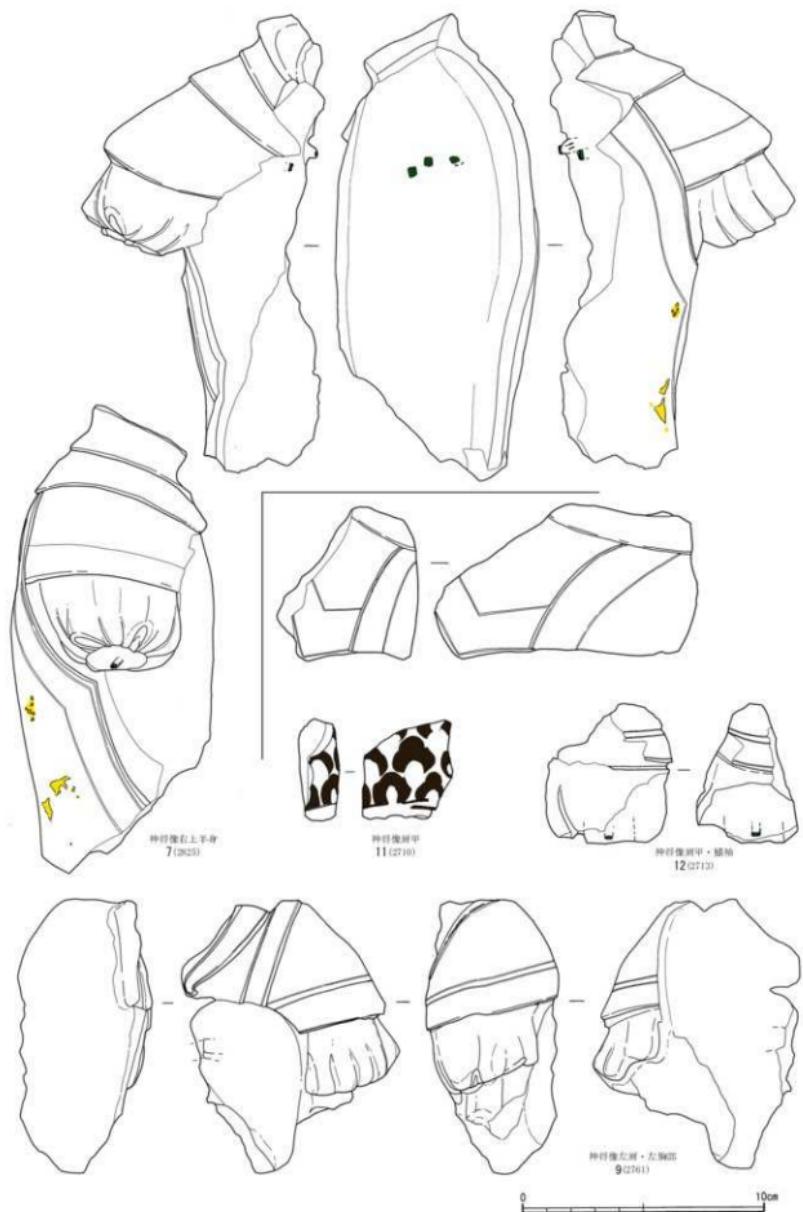
〔遺物番号〕11A96・2825 第 7 図

〔法量〕全高 19.5cm 最大張 11.5cm

最大奥 8.6cm (右脇腹で)

〔形状〕襟甲上の上縁・肩甲・鱗袖(袖口欠失)を含む、神将像の右肩から右脇腹にかけての部分。原初像の像高は、立像として 60~70cm と推定される。鱗袖を着け、下甲・表甲・肩甲・襟甲を着ける。襟甲には縁取線 1 条、肩甲・表甲には内区と外区とを画する界線 1 条と、縁取線 1 条がそれぞれ陰刻される。肩甲の縁は、薄く鋭角に仕上げられ、鱗袖の面との分離感が強調される。

〔構造〕像内の右脇腹辺の高さには、心木が当たっていたとみられる平らな縦の面が確認される。この面は、像の中心よりも大きく右側に偏り(右脇腹の表面より約 3cm 内側)、像の中心を通る心木の痕跡とは考えられない。正面からみると、この心木の当たっていた面は下方に向かって少し外側に広がっている。心木痕のある部位は、新薬師寺十二神持像では、上半身右側の心木の位置に当たる。原初像の心木は、新薬師寺像のように、複数の材木を組み合わせる構造の「木骨心木」であったと推測される。塑土は下土・中土・仕上土の順に盛る。下土には切藁のスサを多く混ぜた痕跡があり、一部に藁スサの実物が残存する。塑土の盛り方は、中土層が下土層よ



第7図 山王庵寺の塑像（神符像）

りも薄く、その厚さは0.4~1.3cm程度である。襟甲はすべて仕上土で塑形する。右腕の内部には銅線の心が通っているらしく、腕の付け根の断面に3本の銅線（各0.3cm×0.3cm）、緒袖下端部の断面に1本（0.3cm×0.3cm）の銅線が確認される。胸部は仕上土層を失い、中土層を露出する。表甲の内区（界線より内側の部分）には金箔地が残存する。

胸部の仕上土層は、胸の輪郭に沿って剥落する。右脇腹辺の表甲上縁が一見、上下2段にみえるが、上段の段差は仕上土層の剥落によるもので、造形ではない。

〔備考〕2002年以降の東大寺塑像神将像に関する研究の進展を受け、山崎隆之氏は奈良時代塑像の心木構造を、①木骨心木、②木彫心木、③改良型木骨心木（準木彫心木）の3類に分類する説を提示し、新薬師寺像や山王庵寺神将像を①類に、東大寺執金剛神像を③類に分類した。山崎隆之「X線画像による塑像の心木構造の調査・研究－国宝東大寺戒壇堂四天王立像と法華堂執金剛神立像－」（奈良国立博物館編『奈良時代の塑造神像』）、2010年12月、中央公論美術出版。（松田誠一郎）

8 神将像右肩・右上腕部

〔遺物番号〕11A96・2749 第7図

〔法量〕全高10.1cm 最大張7.0cm 最大奥5.0cm
〔形状〕肩甲・緒袖（袖口欠失）を含む、神将像の右肩から右上腕部にかけての部分。原初像の像高は、立像として60~70cmと推定される。肩上に襟甲とみられる甲縁（縁取線1条を陰刻）をあらわす。肩甲は、内区と外区を画する界線1条と、縁取線1条が陰刻される。肩甲の下縁には、正面側に稜角がある。背面側の下縁は欠失するが、界線に稜角があり、正面側と同様の輪郭であったことがわかる。肩甲の縁は、薄く鋭角に仕上げられ、緒袖の面との分離感が強調される。

〔構造〕緒袖下端部の断面には、心が通っていたとみられる円孔（径0.6cm）があく。もと銅線に繊維を巻いたものを心としたと推測される。塑土の組成

や盛り方の順序は、神将像右上半身（11A96・2825、7）と同様である。緒袖の膨らんだ部分は、すべて仕上土で造形される。

〔表面〕肩甲の内区の地には、金の細粒が多数付着しており、もと金箔地であったと推定される。文様は、内側と外側を色分けした三山形の小札文である。外側には、熱変して黒色を呈する粒子の粗い顔料が、発泡した状態で厚く残る。内側には、中心部に赤褐色を呈する顔料がわずかに残るが、外側との境目附近には顔料の痕跡がなく、帯状に素地があらわれる。こうした顔料の残存状況からみて、小札文は纏綿彩色（うんげんさいしき）であったと考えられる。肩甲の外区は、赤褐色を呈する顔料の地に、黒色を呈する粒子の粗い顔料で文様が描かれる。顔料が熱変したため文様の輪郭は不明瞭だが、痕跡からみて、上下逆向きの半截花文を交互に並列する意匠であった可能性が高い。緒袖は白色を呈する顔料の地に、四菱入り斜格子文をあらわす（斜格子の1単位は一边1.3cm、幅1.6cm、四菱の菱形は各縦0.6cm、横0.3cm）。文様部分には金の細粒が残存する。文様の輪郭が直線的で鋭いことから、切金を用いたものと判断される。肩上の甲縁は、最外縁を細く帯状に残して、黒色を呈する粒子の粗い顔料が厚く残る。（松田誠一郎）

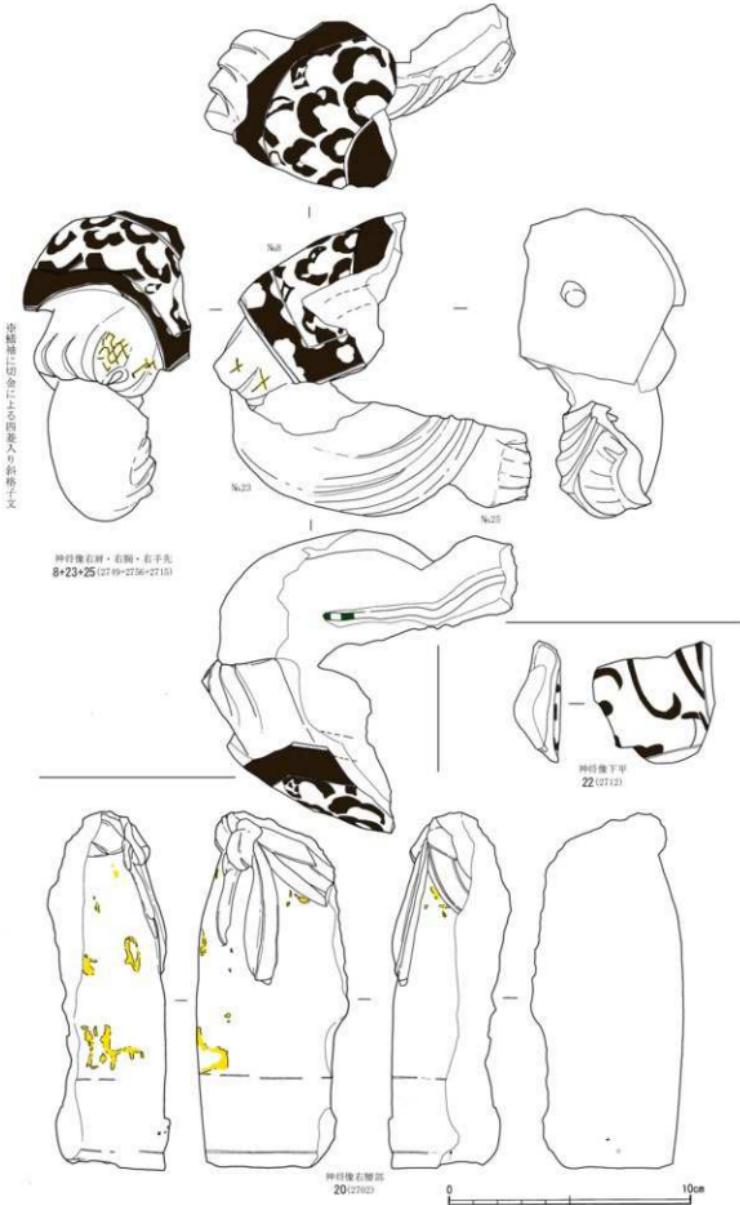
9 神将像左肩・左胸部

〔遺物番号〕11A96・2761 第7図

〔法量〕全高12.1cm 最大張7.0cm 最大奥7.0cm
〔形状〕襟甲の左前端部・肩甲・緒袖（袖口欠失）を含む、神将像の左肩から左胸にかけての部分。原初像の像高は、立像として60~70cmと推定される。肩上に胸甲（欠失）の吊革をあらわす。肩甲には界線2条と縁取線1条、吊革には縁取線1条がそれぞれ陰刻される。

〔構造〕塑土の組成や盛り方の順序は、神将像右上半身（11A96・2825、7）と同様である。胸部の仕上土層は胸の輪郭に沿って剥落する。

〔備考〕神将像右上半身は、肩に吊革がなく、肩甲



第8図 山王庵寺の塑像（神行像）

界線の意匠も異なる。神将像右肩・右上腕部(11A96・2749、8)も、肩に吊革がなく、肩甲の輪郭や界線の意匠に違いがある。したがって、両断片は、この断片とは別個体と考えられる。(松田誠一郎)

11 神将像肩甲

〔遺物番号〕11A96・2710 第7図

〔法量〕全長3.0cm 最大張4.8cm 厚1.5cm

〔形状〕円筒状の曲面をもつ断片で、表面には神将像右肩・右上腕部(11A96・2749、8)と類似する、内側と外側を色分けした三山形小札文の彩色が残る。推定像高60~70cmの神将像の肩甲の内区であろう。〔構造〕仕上土の下層に中土が付着して残存する。彩色は、小札文の外側に、黒色を呈する粒子の粗い顔料が一部発泡した状態で厚く残る。小札文の内側や文様の地には、赤褐色を呈する粒子の粗い顔料が一面に残る。

〔備考〕神将像右肩・右上腕部と比較すると、小札文の1単位の大きさが小さめで、小札文の内側や文様の地の状態にも相違があり、これと同一個体のものとは断定できない。(松田誠一郎)

12 神将像肩甲・縫袖

〔遺物番号〕11A96・2713 第7図

〔法量〕全高6.2cm 最大張4.9cm 厚3.9cm

〔形状〕肩甲の下縁部から縫袖のくくりまでを含む、神将像の上腕部上半。原初像の像高は、立像として60~70cmと推定される。肩甲には界線1条と縫取線1条が陰刻される。

〔構造〕縫袖の下端部断面に銅心(0.3cm×0.3cm)が残る。塑土は、この心に2度に分けて盛られるが、いずれも細かい篩土である。表面は、縫袖に熱変して黒色を呈する顔料が激しく発泡した状態で残る。

〔備考〕縫袖表面の顔料の状態は、神将像右肩・右上腕部(11A96・2749、8)、神将像左肩部(11A96・2761、9)、神将像縫袖(11A96・2711、13)のいずれとも異なり、これらとは別個体と考えられる。(松

田誠一郎)

13 神将像縫袖

〔遺物番号〕11A96・2711 第9図

〔法量〕全高3.9cm 最大張2.0cm 最大奥2.5cm

〔形状〕縫袖のくくりより上の、神将像の上腕部。原初像の像高は、立像として60~70cmと推定される。上部内側に残る一段高い平らな面は、皮甲の可能性がある。皮甲とすれば、法隆寺五重塔北面12号侍者像のように、横幅の広い胸甲の外縁とみるのも一案であろう。

〔構造〕塑土は2層。はじめに少し砂の混じった細かい土で筒状の形を造り、次に細かい篩土で衣文などの細部を仕上げる。表面には、黒色を呈する顔料の痕が残る。(松田誠一郎)

14 神将像右胸部

〔遺物番号〕11A96・2731 第9図

〔法量〕全高4.7cm 最大張3.8cm 厚0.9cm

〔形状〕右肩にかかる吊革の下端部を含む、神将像の胸甲右半部外側の部分。神将像右上半身(11A96・2825、7)と比較すると、胸部の大きさはこれとほぼ釣り合う。原初像の像高は、立像として60~70cmと推定される。表面が摩滅し、一段高くあらわされた覆輪には縫取線の痕跡がわずかに残るが、吊革には陰刻線は確認できない。胸甲の外側に接して残る小さな面には、横に段差がみられる。これは、肩甲とその下層に重なる下甲または縫袖との間の段差とみられる。

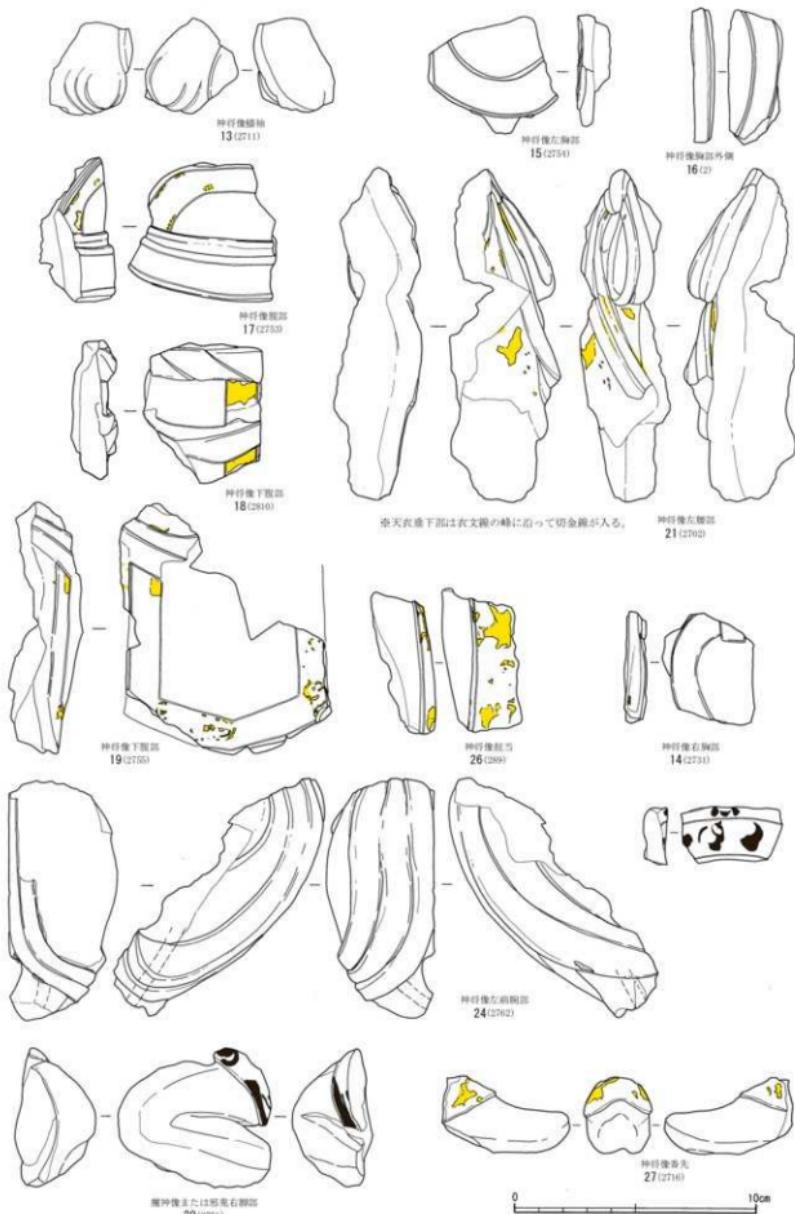
〔構造〕仕上土層だけが剥離した薄片である。表面は、覆輪の外側面にわずかに金箔が残る。

〔備考〕神将像右上半身は胸部の仕上土を失うが、肩に胸甲の吊革があらわされず、この断片とは別個体と考えられる。(松田誠一郎)

15 神将像左胸部

〔遺物番号〕11A96・2754 第9図

〔法量〕全高4.6cm 最大張5.0cm 厚1.6cm



第9図 山王庵寺の塑像（神将像、魔神像または邪鬼）

〔形状〕神将像の胸甲左半部の下部。神将像右胸部（11A96・2731、14）とほぼ同大の胸甲の一部で、原初像の像高も同程度と判断できる。一段高くあらわされた覆輪には、縁取線1条が陰刻され、その輪郭には稜角がある。その稜角からはじまる覆輪の直線部は、胸甲の中央部で、胸甲を締める帶または紐と接する部分とみられる。胸甲中央部の上端には、帶を留める菊座や紐の結びが必ずあらわされるから、それらをあらわした痕跡のないこの断片は、胸甲の下部と断定できる。覆輪の下側に接してわずかに残る面は、胸甲の下層に重なる下甲であろう。

〔構造〕仕上土層に少し中土層が付着して剥離した薄片である。覆輪には金の細粒が付着しており、もと金箔押しであったとみられる。神将像左肩・左胸部（11A96・2761、9）とは接合できず、これとは別個体と考えられる。（松田誠一郎）

16 神将像胸部外側

〔遺物番号〕11A96・2 第9図

〔法量〕全高5.5cm 最大張2.3cm 厚1.0cm

〔形状〕神将像の胸甲外側の部分。神将像右胸部（11A96・2731、14）や神将像左胸部（11A96・2754、15）とほぼ同じ大きさの胸甲の一部で、原初像の像高も同程度と判断できる。一段高くあらわされた覆輪には、縁取線1条が陰刻される。覆輪の輪郭がゆるやかな曲線を描くことから、胸甲の外縁部とみられるが、左半部か右半部かは断定できない。

〔構造〕仕上土層だけが剥離した薄い破片である。（松田誠一郎）

17 神将像腹部

〔遺物番号〕11A96・2753 第9図

〔法量〕全高6.0cm 最大張6.2cm 厚3.1cm

〔形状〕半円形の輪郭をもつ前楯の上端部と2重に締めた革の腰帶をあらわした、神将像の腹部。後述の神将像下腹部2点（11A96・2810、11A96・369+11A96・2755、18・19）と比較すると、前楯の大きさが一回り大きく、原初像の像高は、立像として

70~80cmと推定される。前楯には、界線1条と縁取線1条が陰刻され、革帶には縁取りをあらわす。

〔構造〕仕上土とその下層の中土とみられる2種類の塑土が残る。仕上土の厚みは、前楯上端部で0.2cm前後、腰帶の下端で0.7cm前後。中土には炭化した切藁のスサが残る。前楯の表面には顔料が残る。界線より外側の外区・最外縁には、一面に金の細粒が付着する。顔料がまだらに残る外区（界線より外側、縁取線より内側の部分）は、もと金箔地に彩色で文様を描いていたと推測される。

〔備考〕表甲の上に前楯を重ねる「天平甲制」は、現存遺品では、天平2年（730）頃の薬師寺塔本塑像や天平6年の興福寺旧西金堂八部衆像にあらわれ、以後、日本の神将像に特有な甲制として長く定着する。この断片は、後述の神将像下腹部2点とともに、山王庵寺塑像の製作年代の上限を押さえる上で重要な手がかりとなる。奈良時代における「天平甲制」の成立については、次の文献を参照。松田誠一郎「法隆寺五重塔の著甲像－服制・甲制よりみた制作年代とその意義－」（『国華』1337）、2007年3月。（松田誠一郎）

18 神将像下腹部

〔遺物番号〕11A96・2810 第9図

〔法量〕全高5.6cm 最大張4.6cm 奥1.8cm

〔形状〕繩状に捻られた腰帶以下、天衣の少し下までを含む、神将立像の下腹部。腰帶・天衣の下層に重なる皮甲は前楯で、その中央左端部。神将像右腰部（11A96・2702、20）と比較すると、腰帶の太さや皮甲の大きさがこれとほぼ釣り合う。原初像の像高は、60~70cmと推定される。前楯には界線1条と縁取線1条が陰刻される。

〔構造〕塑土は、下土・中土・仕上土の3層が残存する。下土は切藁のスサを混ぜた痕跡のある粗い土で、中土は細かい植物纖維のスサを混ぜた痕跡のある土で、仕上土は細かい筋土である。前楯の界線より外側の外区・最外縁、及び左端側面の立ち上がり部の表面には、金箔が残る。腰帶の上、左端近くに

も金箔押しの仕上面がごくわずかに残るが、この部分は前楯上端部の外区とみられる。(松田誠一郎)

19 神将像下腹部

〔遺物番号〕11A96・369+11A96・2755 第9図

〔法量〕全高 7.7cm 最大張 8.4cm 厚 2.5cm

〔形状〕神将立像の前楯の剣先形下端部。前楯の上層に重なる右上端の衣部(11A96・369)は、下腹部の前をわたる天衣の一部で、その上方にも前楯の外区がわずかに残る。神将像下腹部(11A96・2810、18)と同程度の大きさで、原初像の像高は 60~70cm と推定される。前楯には内区と外区を画する界線 1 条と、縁取線 1 条が陰刻される。

〔構造〕塑土は、下土・中土・仕上土の 3 層が残存する。各層の組成は、前述の神将像下腹部と同様である。前楯の外区には金箔が残る。

〔備考〕前述の神将像下腹部とは接合できず、これとは別個体の断片と考えられる。(松田誠一郎)

20 神将像右腰部

〔遺物番号〕11A96・2702 第8図

〔法量〕全高 14.5cm 最大張 9.3cm 厚 4.3cm

〔形状〕腰帶・天衣・表甲下縁を含む、神将立像の右腰部。原初像の像高は、60~70cm と推定される。上端部には繩状に捻られた腰帶があらわされ、これに下腹部の前をわたる天衣(向かって右端から続く)が結び付けられる。結び目の左右から下方に垂れる天衣は、現在、その大半を亡失するが、結び目の向かって左側(像の後側)に輪を作り、右側(像の前側)の末端を表甲の下縁近くまで長く垂らしていたことが、痕跡よりわかる。表甲の下方には、内区と外区を画する界線 1 条と、縁取線 1 条が陰刻される。下端部には、表甲の下に続く下甲下端部の立ち上がりがわずかに残る。

〔構造〕塑土は、下土・中土・仕上土の 3 層が残存する。表甲の上層に重なる天衣は、表甲の造形を仕上げた後に、別に作ったものを貼り付けていることが、その剥落部で確認できる。表甲の界線は、天衣

の垂下部をわたる部分で途切れしており、同部を貼り付けた後に陰刻したことがわかる。表甲の縁取線には、天衣による中断はみられない。

下端中央の天衣剥落部(表甲縁取線の約 1cm ほど上)には、銅サビの付着した小孔が横に 3 個あり、孔の周間に塑土が付着する。また、同部分の裏面には銅線 2 本が残存する。これらの銅線および小孔は、表甲下縁より垂れる天衣遊離部の心およびその痕跡とみられる。表甲内区には金箔が残る。(松田誠一郎)

21 神将像左腰部

〔遺物番号〕11A96・2750 第9図

〔法量〕全高 13.7cm 最大張 6.1cm 厚 2.8cm

〔形状〕天衣を含む、神将立像の左腰部。上端部の片輪結びは、下腹部の前をわたる天衣(結び目の向かって左側にわずかに残存)を腰脇で腰帯(現在欠失)に結び付けた部分。神将像右腰部(11A96・2702、20)と比べると、天衣の幅がほぼ等しく、原初像の像高も同程度と判断できる。

〔構造〕塑土は、下土・中土・仕上土の 3 層が残存する。下方部は、仕上土層が剥落し中土層を露出する。その中土露出部の向かって左端部と下端部には、それぞれ縦方向と横方向の太い線が 1 条陰刻される。この陰刻線は、仕上土で造形する表甲の大まかな形を示した下当たりと推測される。天衣の結び目とその向かって右側の輪は、表甲の造形を仕上げた後、仕上土を用いて別に作ったものを貼り付けていることが、裏面で確認できる。表甲内区と天衣垂下部の表面には、一部に金箔が残存する。表甲内区は不規則に一面に金箔が残り、もと金箔地であったと判断できる。これに対し、天衣垂下部は衣文線の峰に沿って線状に金箔が残る。表甲内区とは異なる規則的な金箔の残存状態からみて、切金線を用いたものと判断される。

〔備考〕衣文線の峰に沿って切金線を置く手法は、彫塑では、東寺西院不動明王坐像(平安時代・貞觀 9 年[867])、和歌山県慈尊院弥勒仏坐像(平安時代・寛平 4 年[892])、京都府勝持寺藥師如来坐像(平

安時代・9世紀)、室生寺金堂薬師如来立像(平安時代・9~10世紀、彩色・切金は後補)、清涼寺釈迦如来立像(北宋・雍熙2年〔985〕)などの例がある。絵画では、ボストン美術館所蔵の法華堂根本曼荼羅(まんだら)(奈良時代または唐・8世紀)に古い例がみられる。この手法を用いた彫塑作品としては、この断片が最古の作例となる。(松田誠一郎)

22 神将像下甲

〔遺物番号〕 11A96・2712 第8図

〔法量〕 全高 5.0cm 最大張 5.2cm 厚 1.6cm

〔形状〕 神将像の皮甲の一部。直角をなす2辺の甲縁に沿って縁取線1条が陰刻され、皮甲の隅部と考えられる。甲縁の断面は鋭角をなし、皮甲の薄さが強調される。甲の厚みや面の曲率は、神将像右腰部(11A96・2702、20)などに近く、多くの断片が出土している推定像高60~70cmの神将像の一部と考えられる。この断片のような直角の隅部があらわれる甲の部位としては、表甲下縁の正面、もしくは表甲の下方にあらわれる下甲下縁の正面ないし側面が考えられる。しかし、神将像右腰部の表甲下縁と比較すると、本断片は縁取線外側の外縁部の幅が狭く、界線もあらわされず(神将像右腰部では、縁取線と界線との間隔は約3cm)、表甲下縁に当たるとは考えにくい。他方、下甲下縁に関しては、古代の着甲像では、フリル状にあらわしたり、花弁形を並列する形式のほか、東大寺戒壇堂四天王像のように、水平な下縁をもつ皮甲にあらわす例が多くみられることが注意される。その場合、表甲に比べて外縁部の幅は狭く、界線もあらわさないのが普通で、その形はこの断片と共通する。下甲下縁では、正面に合わせ目をあらわすほか、興福寺八部衆像や東大寺戒壇堂四天王像のように、側面にも切れ目をあらわす例がある。この断片は、こうした正面の合わせ目もしくは左右側面の切れ目に接した、下甲下縁の隅部に当たるものと考えられる。

〔構造〕 残存する塑土は2層。下層は少し砂の混じた細かい土で、上層は細かい筋土の仕上土である。

縁取線より内側の区画には一面に顔料が残り、中心部と縁取線沿いの部分に、粒子の粗い顔料で描かれた飛雲文とみられる文様の痕跡が確認できる。縁取線より外側の外縁部には、金の細粒が付着しており、もと金箔押してあったと考えられる。なお、下甲下縁に彩色文様を描く例としては、東大寺法華堂執金剛神像(縹緲唐花文)、同戒壇堂四天王像(縹緲唐花文)、新薬師寺十二神将像(縹緲宝相華唐草文・縹緲唐花文)などがあり、仕上法の面でも、この断片を下甲下縁とみることに問題はない。(松田誠一郎)

23 神将像右前腕部

〔遺物番号〕 11A96・2756 第8図

〔法量〕 全長 9.6cm 袖幅 5.5cm 最大奥 4.3cm

〔形状〕 窄袖(筒袖)を着けた神将像の、肘から袖口までの右前腕部。上部から内側にかけての仕上面の過半を欠失する。神将像右上半身(11A96・2825、7)などとほぼ大きさが釣り合い、原初像の像高は、立像として60~70cmと推定される。もと肘を屈していたとみられる。

〔構造〕 腕の方向に沿って、心が通ったとみられる円孔(径約0.6cm)があく。上部後半の塑土欠失部では、その孔内に銅線(0.3cm×0.3cm)の心が確認できる。孔の直径は銅線よりも大きく、もとは銅線に紐などを巻き付けて心としていたとみられる。塑土は3層で、まず心の周りに植物繊維を混ぜた痕跡のある細かい土を付け、次に同じ土を盛って腕の概形を作り、最後に細かい筋土を薄く盛って仕上げる。なお、中土層と仕上土層の境界付近には、高熱のため激しく発泡した部分がある。(松田誠一郎)

24 神将像左前腕部

〔遺物番号〕 11A96・2762 第9図

〔法量〕 全長 11.2cm 袖幅 5.6cm

最大奥 4.0cm 手首の太さ縦 2.5cm

同横 2.2cm

〔形状〕 窪袖を着けた神将像の、肘から手首までの左前腕部。上部から内側にかけての仕上面の一部を

欠失する。神将像左肩・左胸部（11A96・2761、9）などとほぼ大きさが釣り合い、原初像の像高は、立像として60～70cmと推定される。肘を浅く曲げる。袖は、外側の面には自然な膨らみがあるが、内側の面は平板に作られる。

〔構造〕腕の方向に沿って円孔（径約0.4cm）が貫通する。もと紐などを巻いた金属線を心としていたとみられ、孔の内面にその痕跡が残る。塑土は3層。まず、心の周りに藁スサを混ぜた痕跡のある粗い土を付け、次に植物繊維を混ぜた痕跡のある砂混じりの土で、腕の概形を作る。最後に細かい箇土を0.1～0.5cmの厚みに盛って仕上げる。窄袖の表面には、黒色を呈する顔料が一面に残り、その一部に金の細粒が残存する。窄袖の縁には、金箔地の痕跡（幅0.7cm）がある。肉身部には一面に顔料が残る。その顔料は熱変して光沢のある黒色を呈し、激しく発泡する。肉身部の荒れた表面は、衣部の平滑な表面と明瞭な違いを示す。

〔備考〕神将像右前腕部（11A96・2756、23）は、この断片に比べて前腕の長さがやや短く、松葉状の分岐を交えた衣文構成など作風も相違し、塑土の構成も異なるので、別個体と考えられる。（松田誠一郎）

25 神将像右手先

〔遺物番号〕11A96・2715 第8図

〔法量〕全長4.7cm 最大張3.2cm

最大奥2.5cm 手首の太さ2.6cm

〔形状〕右手首先とそれにかかる衣縁。大きさや手の形からみて、一連の推定像高60～70cmの神将像の断片と考えられる。第1指は先が亡失するが、当初は伸ばしていたらしい。第2～5指は付け根のみが残存するが、当初は、各指とも屈して拳を作っていたとみられる。掌側は平面に近く、仕上面が回っておらず、身体のどこかに当っていた可能性が高い。第5指側の側面も平らである。手首を周る衣縁が確認でき、窄袖の袖口とみられる。

〔構造〕手首の断面と掌側に心木が当たっていた痕跡が認められる。塑土は2層。はじめに細かい植物

繊維の混ざった土を心の周りに付け、次に細かい箇土で細部を仕上げる。表面は一面に顔料が塗られる。顔料は熱変して光沢のある黒色を呈し、激しく発泡して荒れる。（松田妙子）

26 神将像脛当

〔遺物番号〕9A80・289 第9図

〔法量〕全高5.2cm 最大張4.0cm 厚1.4cm

〔形状〕脛当を含む、神将像の下腿部。推定像高60～70cmの神将像の一部であろう。脛当には、縁取線1条が陰刻される。脛当の正面部には、中央に縦に帯をあらわしたり、稜線が作られるのが普通である。この断片は、中央部にそうした造形がみられないことから、脛当の背面部（ふくらはぎの側に当てる部分）と考えられる。

〔構造〕残存する塑土は2層。下層は植物繊維を混ぜた痕跡のある粗い土で、上層は細かい箇土で0.2～0.3cmの厚みである。脛当の表面には、金箔地が残存する。なお、脛当中ほどにみえる横線は、造形ではなく傷である。（松田誠一郎）

27 神将像沓先

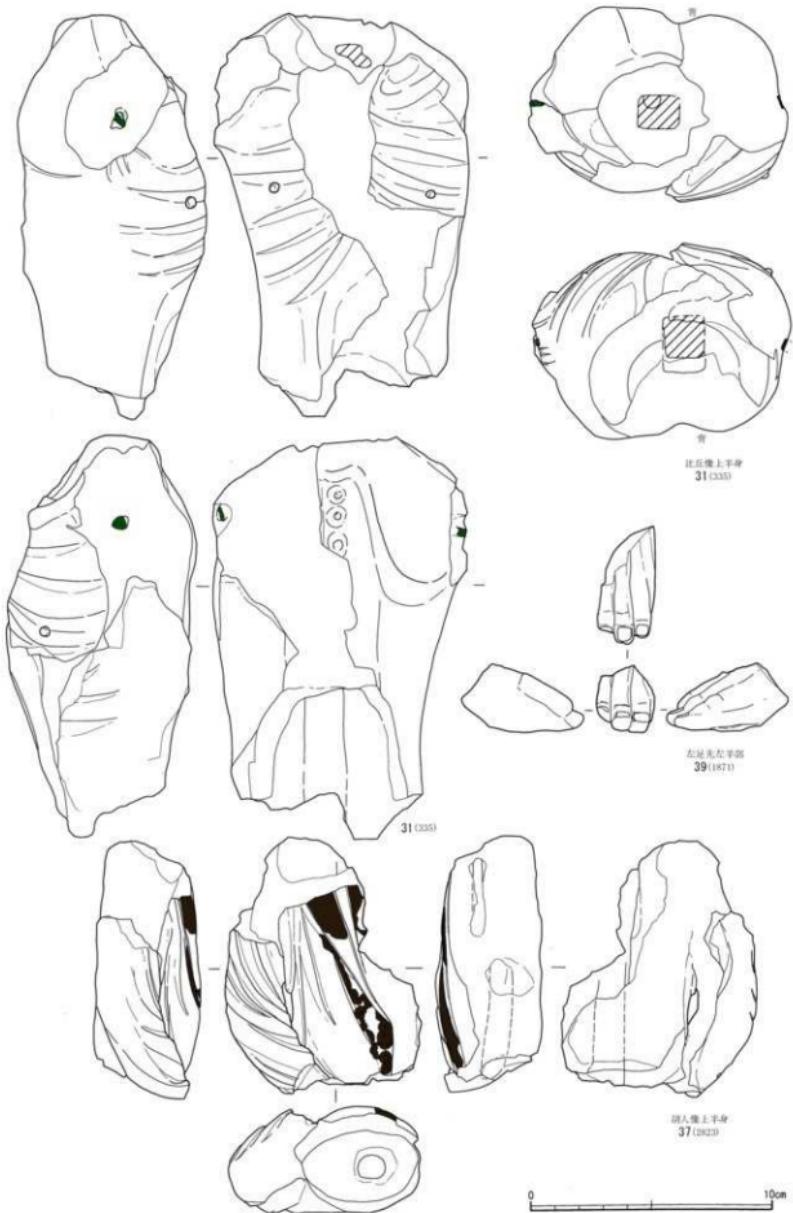
〔遺物番号〕11A96・2716 第9図

〔法量〕全高3.1cm 最大張2.7cm 最大奥4.9cm

〔形状〕沓先とそれにかかる脛当の下縁。一連の推定像高60～70cmの神将像の断片とみられる。上からみた沓の輪郭より、左沓先かとみられる。先端は尖り、わずかに反っており、甲の部分はほっそりとする。

〔構造〕足首の部分には縦に心が通った痕跡がある。塑土は、細かい箇土を3度に分けて盛る。はじめに心に円筒状に土をつけ、次に沓先の概形を造り、最後に表面を仕上げる。脛当には金箔が施されている。沓底は平らで、下土が露出しており、邪鬼や台座などに接していたとみられる。

〔備考〕シンプルな形は、川原寺裏山遺跡出土塑像片や興福寺旧西金堂八部衆像の沓先と似る。特に沓の上面に飾りが無く、脛当の下縁も単純な輪郭であ



第10図 山王廃寺の塑像（比丘像、女性像）

る点で、興福寺沙彌羅像や緊那羅像の当初の姿と近いように思われる。(松田妙子)

29 魔神像または邪鬼右脚部

〔遺物番号〕11A96・2751 第9図

〔法量〕全高 3.0cm 最大張 6.5cm 最大奥 6.0cm

〔形状〕深く膝を屈した右脚の付け根から足首にかけての部分。脚部全体を露出しており、着衣は右脚の付け根に禪の縁の立ち上がりがあらわされるのみである。仰向けに横たわった邪鬼、または仏伝のうち降魔成道の場面の魔神の可能性がある。

〔構造〕塑土は2層。はじめに細かい植物繊維を混ぜた痕跡のある土で概形を造り、次に細かい飾土の仕上土を厚み 0.1cm 前後に盛り、細部を仕上げる。表面は禪の縁に黒色の顔料が残る。膝から下腿部にかけての地付部に、水平方向に立ち上がる面がわずかに残る。その下に 0.8cm ほどの厚みで付着する土は、本体の下土よりも粒子の粗い土で、本体の接していた台座や山岳・礫形などの土と推測される。

〔備考〕邪鬼とすれば脚部の外側を台座に密着させていた可能性があり、東大寺戒壇堂増長天像の邪鬼などに近いポーズであったとみられる。ただし、推定像高 60~70cm の神将像に踏まれる単独の邪鬼としては小さ過ぎる。醍醐寺本『絵因果経』の降魔成道の場面では、空中を飛ぶ魔神があらわされる。この断片が飛行する魔神であれば、塑壁などに貼付けられていたとみることもできる。(松田妙子)

31 比丘像上半身

〔遺物番号〕9A80・335 第10図

〔法量〕全高 16.2cm 胸幅 10.0cm

胸奥（左）7.3cm（背面は仕上土層を失う）

同（右）7.4cm（=最大奥）

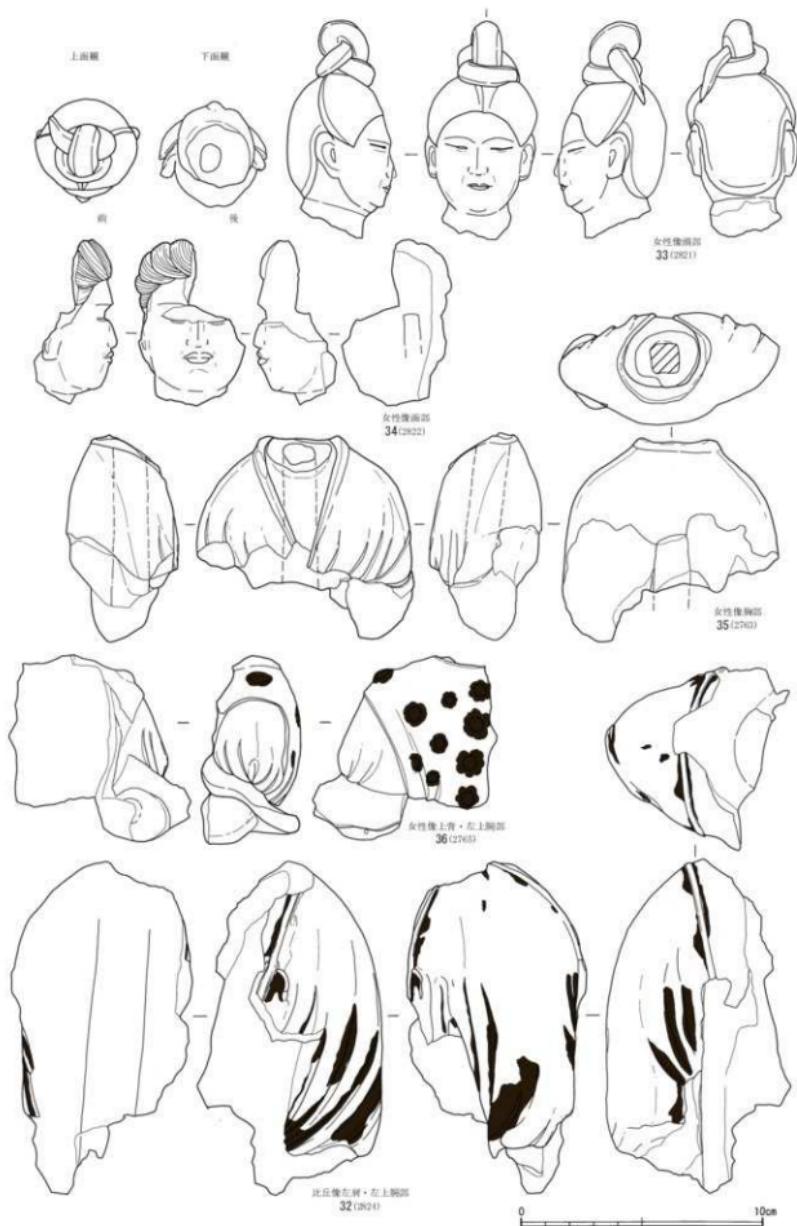
〔形状〕頭部と両腕を失った、裸形の比丘上半身。原初像の像高は、立像として 45~55cm と推定される。瘦身で、鎖骨・肋骨・脊椎・肩胛骨の骨格が露わになる。胸には乳首をあらわし、右腋には胸につながる膜状の部分をあらわすほか、腋下にこまかい

皺をあらわす。

〔構造〕像内中央に炭化した心木が残存する。心木は広葉樹環孔材（環孔は 1~3 列）製で、胸部内の心木下端部は長方形（1.7cm×2.0cm）の断面を示す。その断面は鋸で切ったように平らな面で、構造的にはやや不自然だが、ここで心木を縫いでいた可能性もある。頭部内の心木上端部は、面取りがされ不整な断面を示す。胸部内の心木の当たっていた塑土の面には、斜め方向の溝状のくぼみがやや間隔を置いて 2 箇所にみられる。心木にあらわる螺旋状に紐などを巻き付けていたと推測される。

塑土は下土・中土・仕上土の順に 3 層に盛る。下土は小石混じりの粗い土で、スサとして切藁を大量に混ぜる。中土は、わずかに砂の混じった土で、スサとしてくにゃくにゃと曲がった細かい繊維を混ぜた痕跡がある。仕上土は緻密な土で、スサは確認できない。製作工程は、心に対して下土を大まかに付いた上で、中土を厚めに盛り、像の概形を造形する。中土層の厚みは、胸部の断面でみると、左脇腹辺で 1.4cm、右脇腹辺で 2.0cm、背中で 0.6cm、腹部で 1.0cm 前後である。仕上土の厚みは、確認できる部分で 0.1~0.6cm である。胸部中央から左胸下・腹部にかけての部分や、背面の左肩周辺から背中の中央にかけての部分は、仕上土層が中土層との境目から剥離して失失する。左胸部の仕上土層（現存）も、中土層との境目から剥離する。こうした部分で中土層の表面を観察すると、鎖骨・肋骨・臍までが中土の段階で造形されていることが判る。両腕の付け根には、銅線（0.3cm×0.3cm）の心が残存する。腕の銅心の太さは、菩薩像胸部（9A80・336、1）や神将像右上半身（11A96・2825、7）と同じである。表面には、全面に黒色を呈するやや粒子の粗い顔料が残存する。背面の一部には光沢があり、薄い自然釉のような状態を呈する仕上面がみられる。

〔備考〕自然釉をかけたような表面は、女性像面部（11A96・2822、34）にもみられる。肋骨が浮き出た痩せた肉身の表現は、法隆寺五重塔北面の羅漢像（北 21・22・23・24・26・27 号像、和銅 4 年 [711]）



第11図 山王庵寺の塑像（比丘像、女性像）

にもみられる。法隆寺塔本塑像とこの断片を比較すると、ほそりとした体つきに共通性がみられる。その一方、この断片の胸郭の膨らみや背面での肩胛骨の隆起は、実際の人体を想起させるほどリアルであり、細部も細かく丁寧に造り込まれていて、肉身の表現が一段と現実的になっていることがわかる。

松田妙子氏は、胸部の骨格表現に着目し、本断片の表現が、法隆寺五重塔北面の羅漢像にみられる肋骨を放射状に短くあらわしたやや観念的な表現とは異なり、むしろ、興福寺旧西金堂十大弟子像のうち富樓那像や迦旃延像（天平 6 年〔734〕）にみられる内臓を取り囲む意識が看取される写実味のある表現により近いことを指摘する。松田妙子「山王庵寺出土塑像片 神将像・比丘像（挿図解説）」（『国華』1337）、2007 年 3 月。

また、形状については、着衣があらわされない点に特徴がある。法隆寺塔本塑像の羅漢像では、偏袒右肩に袈裟を着ける像が多く（北 26 号像のみ、袈裟の末端を正坐した両脚部に掛け、胸腹部を露出する）、法隆寺金堂旧壁画の第 1 号壁の十大弟子像、同第 9・10 号壁の 2 比丘像、興福寺旧西金堂の十大弟子像でも、半裸の像はみられない。半裸のこの断片は、比丘形像としては異例に属するといえよう。（松田誠一郎）

32 比丘像左肩・左上腕部

〔遺物番号〕11A96・2824 第 11 図

〔法量〕全高 13.8cm 胸奥（左）7.2cm

最大張 6.7cm 最大奥 7.6cm

〔形状〕吊紐つきの袈裟を着けた像の、左肩から左上腕部にかけての部分。原初像の像高は、立像として 45～55cm 前後と推定される。興福寺旧西金堂の十大弟子像のうち富樓那像・迦旃延像に同様の着衣形式がみられ、比丘像であったと推定される。

〔構造〕像内には、心が当たっていたとみられる平らな縫の面が残る。塑土は、下土・中土・仕上土の 3 層。下土は小石混じりの粗い土で、スサとして切藁を混ぜた痕跡がある。藁スサには長さ 1.0cm 以上

のものもある。中土は下土より細かい土で、断面にスサの焼失痕とみられる小孔が多くみられ、細かい植物繊維のスサが混ぜられていたとみられる。そのほか、短い切藁のスサを混ぜた痕跡もある。仕上土は緻密な土で、雲母が混じる。塑土の盛り方は、中土層が下土層よりも薄く、その厚さは 1.0cm 前後である。肩をわたる袈裟の吊り紐は、結び目左側の輪や下端部に袈裟の仕上面から剥離亡失した部分があり、別に作ったものを貼り付けていたことがわかる。表面の窪んだ部分には、現状で赤色を呈する顔料が残存する。（松田誠一郎）

33 女性像頭部

〔遺物番号〕11A96・2821 第 11 図

〔法量〕全高 8.6cm 髮頂一顎 7.6cm

頭頂一顎 4.9cm 面長 3.9 cm

面幅 3.1cm 耳張 4.3cm 面奥 4.3cm

〔形状〕頭部を含む、髪を結った俗人女性の頭部。原初像の像高は、坐像として 20～25cm と推定される。前髪を左右に梳き分けて両耳の上部に少しかかるようにし、後髪とともに頭頂で束ねる。髪の結い方は、束ねた髪で前方から後方に向かってアーチをつくり、後方より元結部の周囲を右周りに一巡させ、右側方よりアーチの中心を通し、先端を左側頭部後ろに垂らす。髪、地髪部とも毛筋はあらわさない。髪際は緩やかな弧を描く。耳は自然な大きさに造られる。髪型、耳の形、像高から、俗人の供養者とみられる。

〔構造〕頭部内中央に、地髪部中程の高さまで、縦に心の通っていた孔があく。頭部の断面でみると、孔は綺麗な円形（径 0.8cm）である。頭部の孔内には細かい布目が確認できるので、頭部では心に布を巻いていたと考えられる。また、頭部の孔内には細い帯状のものが螺旋状に当たっていた痕跡があり、頭部内では心に紐などを巻いていたとみられる。塑土は下土・仕上土の順に盛る。下土は植物繊維（0.3cm 位）がわずかに混じる粒子の細かい土で、仕上土は細かい筛土である。表面は彩色仕上げであ

ったとみられる。肉身部には赤褐色を呈する粒子の粗い顔料が残存する。この顔料は熱変し、発泡して荒れる。このため目鼻立ちが不明瞭となり、鼻は欠失している。頭髪部は肉身部の状態とは異なり、平滑な表面である。

〔備考〕従来、山王庵寺出土として知られる個人蔵の女性像頭部と酷似する。ただし、髪の結い方は個人蔵の女性像とは左右対称をなしている。この2像は同一場面の対称位置に安置された可能性があろう。目、鼻、口が顔の中央に集まるのは、女性像(11A96・2822、34)や神持像頭部(11A96・2820、6)と同様である。豊かな髪、微妙な抑揚がつけられたこめかみや、頬から頸にかけての内取りの柔らかさなど、その破綻のない表現力には驚かされる。また、的確な耳の塑形は、細部においても高い造形力が發揮されていることを示している。地髪部や髪際の形が、法隆寺塔本塑像の女性侍者像や川原寺裏山遺跡出土の女性像頭部と共通する。(松田妙子)

34 女性像面部

〔遺物番号〕11A96・2822 第11図

〔法量〕全高 6.8cm 面長 4.6cm

面幅 3.9cm (現状)

正中線-面部右端 2.1cm

正中線-右耳 2.7cm 最大張 4.3cm

最大奥 3.2cm

〔形状〕地髪右半部、右耳下半部を含む女性像の面部。両目より上の中央部から左端部にかけての部分を欠失するが、上瞼を除く右目と左下瞼以下の顔面は残存する。原初像の像高は、坐像として25cm前後と推定される。地髪部は束ね目と毛筋を丁寧にあらわす。耳は全体に小さく、耳垂はやや角張り貫通しない。口は口角をわずかに上げて結び、口端では上唇が下唇の上に被るように造られる。人中と頬のくくりをあらわす。耳の形、像高から俗人の供養者とみられる。

〔構造〕裏面には心(縄などを巻き付けた痕跡はない)が当たっていたとみられる、平らで黒色を呈し

た部分がある。焼失した心木は角材など平面を持つ形であったと考えられる。塑土は下土・中土・仕上土の順に盛る。下土は薙スサ(0.3~1.0cm)の痕跡のある粗い土で、中土は植物繊維を含む土で、仕上土は細かい篠土である。中土の段階で大まかな形を造り、仕上土は0.1cm前後の厚みで盛り、顔や髪の細部を塑形する。表面は彩色を施したとみられる。肉身部には黄褐色を呈する、やや粒子の粗い顔料が残る。部分的に光沢があり、薄い自然釉のような状態を呈する。

〔備考〕表面の自然釉のような部分は、比丘像上半身(9A80・335、31)の背面上にもみられる。中央に目鼻が集まる顔立ちは、親しみを感じさせると同時に強い印象を与える。頬から頸にかけての内取りには微妙な抑揚があり、的確で手慣れたヘラさばきには、極めて高い製作水準が看取される。法隆寺塔本塑像の女性像と比較して、顔の細部の塑形はより細やかで、写実性が増している。(松田妙子)

35 女性像胸部

〔遺物番号〕11A96・2763 第11図

〔法量〕全高 8.1cm 胸奥(左) 4.2cm

同(右) 4.0cm 最大張 8.1cm

〔形状〕頭部付け根から左腕の肘、右上腕半ばまでを含む女性像の胸部。原初像の像高は、坐像として20~25cmと推定される。打ち合わせのある上着と帯を着ける。上着は襟が立ち上がる。左右の襟の合せ目は欠失するが、左襟の下端部の位置から判断して、左身頃が右身頃の上層に重なっていたとみられる。帯は胸高に締めていたらしく、衣文が胸下に集中する。左手は衣文から推測すれば、屈臂して、腹前辺においていたと思われる。服制、像高から俗人の供養者とみられる。

〔構造〕像内中央に炭化した角材(1.5cm×1.4cm)の心木の一部が残存する。木目の粗い材だが、針葉樹か広葉樹かは確認できない。頭部では心木は面取りされ、梢円形(縦1.5cm、横1.2cm)の断面をみせている。像内の下端部では心木が失われており、

心木のあたっていた塑土の面に、約 0.5cm 幅の撲紐を螺旋状に粗く巻いたような痕跡がある。塑土は下土・中土・仕上土の順に盛る。下土と中土は粒子の細かい土で、ごく小さい孔が多数あき、細かい植物繊維を混ぜていたとみられる。中土には光沢のある黒色の粒子と砂が混じる。仕上土は細かい篩土で、白い砂粒・雲母・光沢のある黒色の粒子が混じっている。製作工程は、まず、角材の心の周りに下土を 1.0cm 前後の厚みで盛り、中土で両腕などの概形を造る。最後に仕上土を 0.2~0.3cm の厚みに盛り、衣文などの細部を塑形する。

〔備考〕この制服に似た例としては、法隆寺五重塔の女性像（東 8 号）などがある。ただし、この断片は法隆寺五重塔の女性像に比較して撫肩に造られる。

（松田妙子）

36 女性像上背・左上腕部

〔遺物番号〕 11A96・2765 第 11 図

〔法量〕 全高 7.8cm 最大張 7.2cm

最大奥 4.3cm 上体部の高さ 6.0cm (肩上から背子腰上括りまで)

〔形状〕女性の背面上半左側から、左上腕・左肘までを含む部分。原初像の像高は、坐像として 20~25cm と推定される。緒袖の衣・背子を着ける。背子は現存部下端辺りで絞られていたようで、その衣文があらわされる。左肘は、緒袖衣の下に着ける別の衣（大袖衣か）に覆われる。

〔構造〕下土は藁スサ入り。中土には小孔が多数みられ、細かい植物繊維のスサの痕と思われる。仕上土は緻密である。表面は、背子に花文があらわされる。同形文様を色変わりで交互に配置するか、大型と小型の花文を交互に配置する主文・副文構成と思われるが、放射形構造であること以上の詳細は判明しない。しかし、縹緲は用いない付描風な花文であろうと推測される。また肘の衣に三点文様がみられる。上腕部の表面彩色は、沸き立つような状態を示す。

〔備考〕背子や緒袖を着ける女性像は、法隆寺五重

塔塔本塑像中の像、例えば東 13 号の侍者像（和銅 4 年〔711 年〕）にみられ、本像も供養者などであろう。法隆寺塔本塑像の緒袖は、細かい襞がつき自然に垂下する形であり、本像の裾広がりとなって縁が緩やかに波打つ形は、次代の興福寺八部衆像（天平 6 年〔734 年〕）に近い。更に次の時代になると、東大寺法華堂執金剛神像・同戒壇堂四天王像（以上 8 世紀中頃）のような自然な布の質感を写し大きな襞を作って大きく開く形や、新薬師寺十二神将像（8 世紀中頃）・法隆寺食堂四天王像（8 世紀後半）のように裾を大きく広げ大きく波打たせる形となり、本像の形からは離れていく。本像に近いのは興福寺八部衆像であり、製作年代も近い頃と考えられよう。（瀬山里志）

37 胡人像上半身

〔遺物番号〕 11A96・2823 第 10 図

〔法量〕 高 10.5cm 最大張 7.6cm

最大奥 4.4cm 腹奥 4.3cm (正面衣表面から背面現存下土まで) 胸張 6.1cm

〔形状〕手首までの右腕を含む、胡人の上半身。原初像の像高は、立像として 30cm 前後と推定される。右胸から腹部、右上腕下半から前腕が残り、頭部、右胸から右肩にかけての部分、及び右肩から背面にかけての表層を欠失する。袖は細い筒袖で、長い襟を左前に打ち合わせて左腹上のボタンで留める。いわゆる胡服である。右襟を大きく折り返す。左襟の処理は保存状態の関係で明確ではなく、片襟であった可能性もある。

〔構造〕像内には心木を 2 本通した痕がある。1 本は径約 1cm で体幹部中央よりやや左寄りに通り、心木に紐状のものを巻いていた痕跡が孔の内面に残る。もう 1 本は径約 0.4cm で胸部から頭部に向けて通り、心木が短い藁で包まれていた痕跡がある。塑土は、下土・中土・仕上土の 3 層である。下土・中土はともに細かい石の混じる土で、下土には藁スサ、仕上土には細かい植物繊維を混ぜた痕跡がある。仕上土は場所により数層に重なり、慎重に塑形されたこと

がうかがえる。右襟下半に团花文の痕跡が残るが、この部分は襟に沿った帯状区画と思われ、半截の团花文が両側から交互に並ぶ構成であろう。团花文はC字形をつなげ、その連結部に三裂花弁を置く形である。完形の团花文を想定した場合、C字形は4個を連ねたものであろう。

〔備考〕供養者の胡人をあらわしたものだろうか。法隆寺五重塔搭本塑像中にも西域風な供養者がみられるが、この像のような胡服を着けた者は見当たらない。胡服を着けた胡人の造形としては、正倉院の紫檀木画槽琵琶、楓蘇芳染螺細槽琵琶の押撥に駱駝や象に騎乗する姿が描かれ、木画紫檀基局の側面に駱駝を牽引する姿があらわされる。この像は日本最古の胡服を着けた胡人の造形と思われる。(瀬山里志)

39 左足先左半部

〔遺物番号〕11A96・1871 第10図

〔法量〕高2.7cm 全長4.8cm 最大張2.7cm

〔形状〕第3~5指を含む左足先左端部。原初像は立像として60~70cmと推定される。第3指は半ば以下を欠失する。指の付根には関節の膨らみをあらわす。像の種類としては、裸足の金剛力士や、板金剛(サンダル状の履物)を履いた天部・羅漢などが考えられる。おとなしい足指の表現や像の大きさから、八部衆のうち阿修羅像を想定することもできる。

〔構造〕塑土は、細かい篩土を2度に分けて盛る。表面には、一面に熱変して濃褐色を呈する顔料が、発泡した状態で残る。神将像脛先(11A96・2716、27)と同様、足裏は平らで、仕上土が回っておらず、台座や板金剛などに密着していたとみられる。(松田妙子)

40 天衣

〔遺物番号〕11A96・2714 第12図

〔法量〕全長2.6cm 最大張3.4cm 厚0.6cm

〔形状〕衣縁を含む天衣の小断片。全体に薄く、表面・裏面とも仕上げられており、天衣遊離部などの可能性がある。

〔構造〕内部には衣縁に沿うように銅線の心(0.1cm×0.1cm)が残存している。仕上土の剥落した面に目の細かい布の痕跡がみられる。断面でみると、銅線を包む二つ折りの布を心にし、その片側に細かい篩土を付け、さらに同様の土で表面を仕上げていることがわかる。もとは2本の銅線の間に布をわたして心としていたものと考えられる。

〔備考〕この断片の厚みは最大で0.6cmしかなく、細部にまで神経の行きわたった造りを示す。(松田妙子)

41 衣の下端部

〔遺物番号〕11A96・2161 第12図

〔法量〕全長5.3cm 最大張3.1cm 厚1.3cm

〔形状〕折り畳みのある衣の下端部。裙裾や天衣、条帛(じょうはく)の末端などの可能性がある。

〔構造〕仕上土層だけが剥離した薄い断片。裏面は表面の折り畳みの形に沿って窪んでおり、仕上げより前の段階で衣文の概形が造形されたとみられる。

〔備考〕断片ながら、形に密度を感じられる。(松田妙子)

42 衣部

〔遺物番号〕11A96・923 第12図

〔法量〕全長4.5cm 最大張3.9cm 厚1.7cm

〔形状〕全体に湾曲し、衣文の残る断片。

〔構造〕仕上土層だけが剥離した薄い断片。

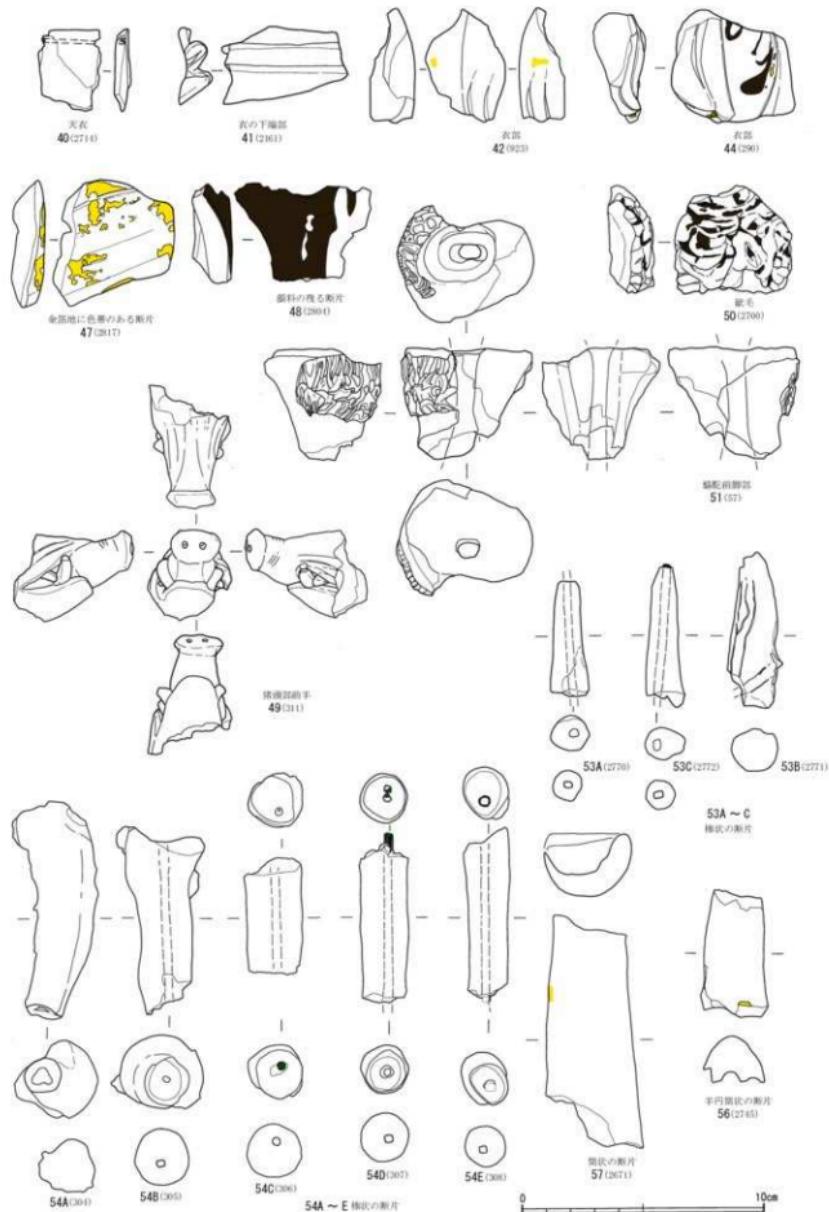
〔備考〕丁寧に塑形された衣文や、薄茶色の焼色を呈する仕上土は、胡人像上半身(11A96・2823、37)と共に、その右肩に当たる可能性が高い。(松田誠一郎)

44 衣部

〔遺物番号〕9A80・290 第12図

〔法量〕全長4.2cm 最大張4.8cm 厚1.9cm

〔形状〕衣縁を含む衣部の断片。中央から左右にかけて全体に緩やかに湾曲する。向かって右側に、左前の打ち合わせをあらわす。下端向かって左側には、



第12図 山王廃寺の塑像（天衣、衣、猪、駒、棒状の断片ほか）

蓮弁の先のように反り返る衣縁がみられる。菩薩像の裙の折返部、台座蓮弁に懸かる裳の一部などの可能性がある。

〔構造〕 残存する塑土は2層で、下層は植物繊維が混じった痕跡のある土で、上層は細かい筋土の仕上土で、厚みは0.3cm程度である。表面には薄い褐色を呈する粒子の細かい顔料が残る。衣縁の一部には金箔が残存する。裏面はほぼ平らである。(松田妙子)

47 金箔地に色帯のある断片

〔遺物番号〕 11A96・2817 第12図

〔法量〕 全長5.0cm 最大張5.4cm 厚1.4cm

〔形状〕 全体に浅く湾曲した断片。

〔構造〕 残存する塑土は2層。下層は粗い土で、上層は細かい筋土の仕上土で、厚みは0.2cmほどである。表面は一面に金箔が残るほか、茶褐色を呈する顔料による色帯が平行状に3本残る。中央の色帯の幅が0.3~0.4cm、残り2本の色帯の幅が0.2cmである。その色帯の間隔は1.1cmと1.8cmである。この色帯の一部に金の細かい粒が残る。もと金箔地に顔料で色帯を描いていたとみられる。

〔備考〕 金地彩色であるとすれば、神将像の甲の一部の可能性がある。(松田妙子)

48 顔料の残る断片

〔遺物番号〕 11A96・2804 第12図

〔法量〕 全長5.7cm 最大張3.9cm 厚1.8cm

〔形状〕 緩やかに湾曲する断片。

〔構造〕 残存する塑土は3層。下土は植物繊維の混じる粗い土で、中土にわずかに付着して残る。中土と仕上土はともに細かい筋土である。表面には粒子の粗い顔料が厚く一面に残る。この顔料は熱変して、光沢のある黒色を呈し、激しく発泡する。(松田妙子)

49 猪頭部前半

〔遺物番号〕 9A80・311 第12図

〔法量〕 全高3.2cm 最大張3.2cm 最大奥5.3cm

〔形状〕 猪の鼻先から下頬にかけての部分。口の左

右には、上下より噛み合わせる歯をあらわす。下頬より生える歯は長く、そのため上口唇が少しちゃくれる。鼻先は反り、鼻孔が穿たれる。鼻の上面には横皺が多くあらわされる。

〔構造〕 上顎内から鼻先に向かって、心が通っていたとみられる丸く細い孔(径0.3cm)があく。孔の内面には、細い紐ないし藁スサなどを巻いた痕跡がある。塑土は下土・中土・仕上土の順に盛られる。下土と中土は植物繊維の混じる細かい土である。仕上土は細かい筋土で、0.2~0.3cmの厚さに盛り、細部を仕上げたとみられる。表面には、一面に光沢のある赤褐色を呈する顔料が残る。

〔備考〕 小断片ではあるが、猪の特徴が的確に細かく表現されている。猪が登場する仏伝中の場面としては、降魔成道(猪頭の魔神像)、涅槃(十二獣像のうちの猪頭像)が考えられる。山王庵寺の塔本塑像が、どのような場面で構成されていたかを考える上で重要な断片である。(松田妙子)

50 獣毛

〔遺物番号〕 11A96・2700 第12図

〔法量〕 全長4.8cm 最大張4.5cm 厚1.8cm

〔形状〕 獣のたてがみなど、獣毛とみられる断片。

〔構造〕 仕上土層だけが剥離した断片。表面には竹へラの先端などでついたような窪みが造られ、窪みに濃赤色を呈する顔料が残っている。裏面は凹凸が無く、全体に浅く湾曲している。

〔備考〕 西方や南方の外国人のウェーヴのかかった頭髪の可能性も考えられる。(松田妙子)

51 駱駝前脚部

〔遺物番号〕 9A80・57 第12図

〔法量〕 全高4.6cm 最大張5.4cm 最大奥5.0cm

〔形状〕 先端の縮れた毛が片側の面にある逆円錐状の断片。断片の上面、底面とも楕円状で、上面に対して底面は細く造られる。また、上面は何かに密着していたとみられ、底面は欠損面となっている。駱駝の前脚の付け根に当たる可能性が高い。毛筋が直

線的に塑形されるので立っている駱駝とみられ、原初像の像高は30~40cmと推定される。

〔構造〕内部中央に、縦に真っすぐに心が通っていたとみられる円孔（径0.6cm）が貫通する。孔の内面には繩などを巻き付けた痕跡は確認できない。欠損面より下にさらに脚部が続いているとみられる。塑土は2層で、はじめに心に植物繊維を含む細かい土を付け、次に細かい篩土で表面を仕上げる。毛の部分は皮膚の面を仕上げた上で、同じ篩土をさらに盛りつけ、ヘラで毛筋を塑形する。表面は毛のある側の皮膚に顔料が残る。この顔料は熱変して、光沢のある黒色を呈し、少し発泡する。毛のない側には一部黒色の顔料の及ばない素地の部分がある。毛の部分は褐色を呈する顔料が残る。

〔備考〕7世紀第4四半期以後の唐墓から出土した駱駝俑には、前脚の付け根に毛を竹ヘラで塑形する例が多くみられる。付け根の周囲全体に毛をあらわすものと、前面から外側のみに毛をあらわすものとがある。この断片は、陝西省独孤思敬夫婦墓（長安3年〔703〕思敬葬、景龍3年〔709〕夫人追葬）、河南省安菩夫婦墓（景龍3年）、陝西省鮮于庭墓（開元11年〔723〕）から出土した駱駝俑の前脚に類似する。また、唐墓より出土する駱駝には胡人の牽駱俑を伴うことが多く、山王庵寺塑像の中に胡人像上半身（11A96・2823, 37）が含まれていることは興味深い。（松田妙子）

53 棒状の断片 第12図

A〔遺物番号〕11A96・2771

B〔遺物番号〕11A96・2772

C〔遺物番号〕11A96・2770

〔法量〕

A全長6.4cm 径2.3cm

B全長4.7cm 径1.4cm

C全長5.9cm 径1.4cm

〔形状〕

Aは先端が細く、基部が太い。太い方の一端は造形が終わっており、側面に欠損面があるので、横方

に向て造形が続いているとみられる。

B・Cはともにほぼ円柱状であるが、片側が幾分細くなる。

Cの先端部はほぼ完存している（わずかに先端部の塑土を失う）。

〔構造〕

Aは心の有無は確認できない。基部の欠損面に斜めに孔（径0.4cm）が貫通する。塑土は植物繊維の混じる土の上に、細かい篩土を薄く盛って仕上げる。表面には白色を呈する顔料が残り、縦に裂けたような亀裂が入る。

B・Cはともに先端に銅心（0.4cm×0.3cm）があらわれる。基部の一部にわずかだが立ちあがりが残る。塑土は細かい篩土を2度にわけて盛る。表面には顔料が残る。

〔備考〕

B・Cは形状・構造が共通し、同類のものとみられる。（松田妙子）

54 棒状の断片 第12図

A〔遺物番号〕9A80・304

B〔遺物番号〕9A80・305

C〔遺物番号〕9A80・306

D〔遺物番号〕9A80・307

E〔遺物番号〕9A80・308

〔法量〕

A全長8.1cm 上端の径1.5cm

B全長7.6cm 上端の径1.9cm 下端の径3.4cm

C全長4.3cm 上端の径1.9cm 下端の径2.4cm

D全長6.7cm 上端の径1.7cm 下端の径2.0cm

E全長7.2cm 上端の径1.6cm 下端の径1.8cm

〔形状〕

A・Bは一端が細く、一端は太くなり、微妙な起伏のある造形を示す。

Aは太い方の一端は造形が終わっており、側面に欠損面があるので、横方向に造形が続いているとみられる。

〔構造〕

A～C は中心に心の通ったとみられる円孔があく。A は孔の内面に螺旋状の痕跡が確認される。D・E は内部中央に銅心（各 0.3cm × 0.3cm）が残る。

A～E の塑土は細かい篩土を 2 度に分けて盛る。

A・B は表面二流紙の荒い顔料が残り、その顔料が熱変して光沢のある濃褐色ないし黒色を呈し、激しく発泡している。

〔備考〕

A・B は、表面の状態が他の肉身部の断片と近く、形状を勘案すれば、小像の腕の可能性が高い。

D・E は、形状・構造が棒状の断片（11A96・2772、11A96・2770、53-BC）と類似する。（松田妙子）

56 半円筒状の断片

〔遺物番号〕 11A96・2745 第 12 図

〔法量〕 全長 5.2cm 最大張 2.8cm 厚 1.9cm

〔形状〕 半分を失った円筒状の断片。

〔構造〕 内部中央には心の通ったとみられる円孔があく。裏面でその孔の内面を観察すると、心に巻かれていたとみられる細い紐の痕跡が確認される。塑土は、心に比較的粒子の細かい土を 1～2 層に付け、次に細かい篩土で表面を仕上げる。表面は一面に、熱変して光沢のある黒色を呈する顔料が残る。（松田妙子）

57 筒状の断片

〔遺物番号〕 11A96・2671 第 12 図

〔法量〕 全長 9.7cm 最大張 4.1cm 厚 2.8cm

〔形状〕 断面が蒲鉾型を呈する筒状の断片。

〔構造〕 内部中央に心が通っていたとみられる孔があく。片側には土が詰まっている。塑土は 2 層。まず、心の周りに植物纖維の混ざった痕跡のある土を付け、次に細かい篩土を盛って仕上げる。表面の一部に金箔が残る。（松田妙子）

59 直方体状の断片

〔遺物番号〕 11A96・2728 第 13 図

〔法量〕 全高 6.0cm 最大張 7.9cm 最大奥 3.0cm

〔形状〕 3 つの平面と 1 つの隅角で構成される断片。箱形の造形物の一部とみられる。このうち 2 面には界線とみられる直線 1 条が陰刻される。

〔構造〕 残存する塑土は 2 層。下層は藁スサの痕跡のある、小石混じりの粗い土である。上層は細かい篩土を厚み 0.5～1.0cm に盛る。界線のある面のうち、大きい方の面に金箔が残る。

〔備考〕 台座、倚像の椅子、涅槃像の寝台などの可能性ある。（松田妙子）

60 陰刻線 2 条のある断片

〔遺物番号〕 11A96・2691 第 13 図

〔法量〕 全高 7.3cm 最大張 5.1cm 最大奥 2.2cm

〔形状〕 平面に界線とみられる陰刻線 2 条のある断片。

〔構造〕 残存する塑土は 3 層。下層は藁スサ（長約 1.5cm）の痕跡のある粗い土、中層は植物纖維を混ぜた痕跡のある細かい土、上層は細かい篩土の仕上土である。表面にはわずかに金箔が残る。

〔備考〕 直方体状の断片（11A96・2728、59）とは、平面に陰刻線があること、金箔が残ること、薄い煉瓦色の焼色を呈することなどに共通点がある。しかし、塑土の構成がやや異なり、同一個体とは断定できない。（松田妙子）

61 棱線のある断片

〔遺物番号〕 9A80・292 第 13 図

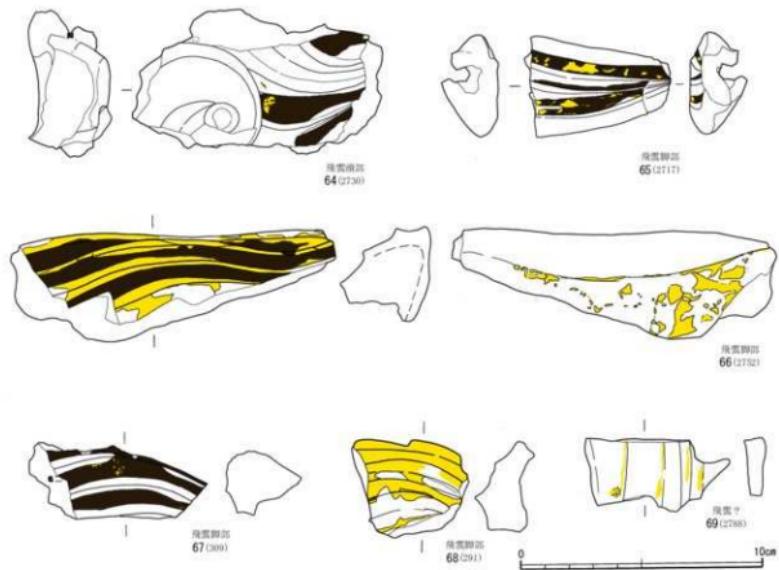
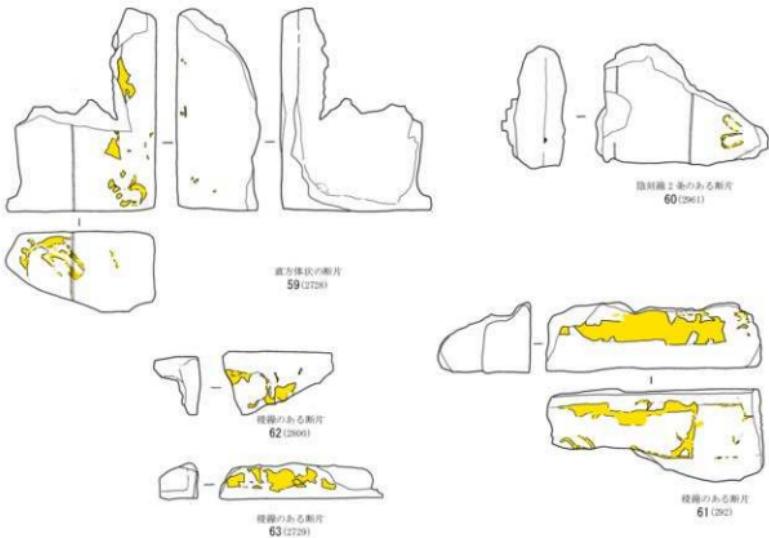
〔法量〕 全高 8.6cm 最大張 3.7cm 最大奥 2.6cm

〔形状〕 2 つの平面を持つ棱線のある断片。箱形の造形物の一部とみられる。

〔構造〕 残存する塑土は 2 層で、ともに細かい篩土である。表面には金箔が残る。

〔備考〕 直方体状の断片（11A96・2728、59）とは、仕上面の状態や塑土の構成が異なり、別個体とみられる。（松田妙子）

62 棱線のある断片



第13図 山王庵寺の塑像（直方体状の断片、飛雲ほか）

〔遺物番号〕11A96・2800 第13図

〔法量〕全高4.5cm 最大張2.7cm 最大奥1.8cm

〔形状〕2つの平面を持つ稜線のある断片。箱形の造形物の一部とみられる。

〔構造〕仕上土層だけが剥離した断片。一面にのみ金箔が残る。

〔備考〕直方体状の断片(11A96・2728、59)とは、平面があること、金箔が残ること、薄い煉瓦色の焼色を呈することなどに共通点がある。(松田妙子)

63 稜線のある断片

〔遺物番号〕11A96・2729 第13図

〔法量〕全高6.6cm 最大張1.3cm 最大奥1.5cm

〔形状〕2つの平面を持つ稜線のある断片。箱形の造形物の一部、もしくは框のような部分とみられる。そのうち1面に稜線に沿って界線1条が陰刻される。

〔構造〕残存する塑土は2層で、ともに細かい筋土である。界線のある面に金箔が残る。

〔備考〕直方体状の断片(11A96・2728、59)とは、塑土の構成が異なり、別個体とみられる。(松田妙子)

64 飛雲頭部

〔遺物番号〕11A96・2730 第13図

〔法量〕全高6.0cm 最大張10.2cm 最大奥3.2cm

〔形状〕雲頭の巻き込みの一部と、雲脚の稜線の一部が残る。全体の造形にはあまり奥行きがない。

〔構造〕表面には金の細粒や彩色痕がみられる。一部に溶銅が付着する。(瀬山里志)

65 飛雲脚部

〔遺物番号〕11A96・2717 第13図

〔法量〕全高4.2cm 最大張6.1cm 最大厚1.9cm

〔形状〕細くなりながら伸びる雲脚の末端近くと思われる断片。仕上面は裏面にまで及ぶ。表面には稜線を塑形するが、造形にはあまり奥行きがない。

〔構造〕裏面では、心の通っていた部分が溝状に欠損する。表面の仕上げは、稜線間の谷の部分に縞状の彩色痕がみられる。彩色は現状で鈍い赤色を呈し、

所々泡状に沸き立ったような状態を示す。金の細粒が顔料の残る部分を中心に残存するのは、金箔地に彩色をしていたためとみられる。(瀬山里志)

66 飛雲脚部

〔遺物番号〕11A96・2752 第13図

〔法量〕全高4.6cm 最大張13.1cm 最大奥4.4cm

〔形状〕細くなりながら伸びる雲脚。仕上面は裏面にまで及ぶ。表面には稜線を塑形するが、裏面では稜線は省略される。

〔構造〕裏面では、心の通っていた部分が溝状に欠損する。塑土は2層が残存する。下層の土には小石が混じるが、スナの痕跡は確認できない。仕上土は緻密な筋土で、0.2~0.3cmの厚みに盛る。表面は全面を金箔地とした上、稜線間の谷の部分に縞状に彩色を施し、稜線に沿って1.0cm前後の幅で金箔地を残す。同種の飛雲断片のうち、最も良好な保存状態を示す。(瀬山里志)

67 飛雲脚部

〔遺物番号〕9A80・309 第13図

〔法量〕全高2.8cm 最大張7.1cm 最大奥3.4cm

〔形状〕少しうねりながら細く伸びる雲脚。断面はほぼ三角形を呈し、そのうち2面を仕上面とし、稜線をあらわす。

〔構造〕面積が広い方の断面でみると、内部には銅線の心(0.2cm×0.2cm)が通る。面積が狭い方の断面には、この心は貫通していない。表側の2面には、稜線間の谷の部分に縞状に顔料が残り、稜線に沿った顔料痕のない帯状部(幅0.6cm前後)に金箔が残存する。残りの1面は不整形で彩色痕もみられない。(瀬山里志)

68 飛雲脚部

〔遺物番号〕9A80・291 第13図

〔法量〕全高4.1cm 最大張5.1cm 最大奥3.4cm

〔形状〕平行状に弧を描く稜線2条をあらわす。

〔構造〕表面は金箔地で、稜線を挟んだ上下の部分

に縞状に顔料が残る。(瀬山里志)

69 飛雲?

〔遺物番号〕11A96・2788 第13図

〔法量〕全長 5.9cm 最大張 2.9cm 厚 1.7cm

〔形状〕稜線1条をあらわす。

〔構造〕仕上土層だけが剥離した薄片。表面は全体に金の細粒が残り、もと金箔地であったとみられる。稜線に沿って帯状(幅1.2cm)に顔料痕のない部分がある。これに接して稜線に平行な帯状の彩色痕がみられる。その顔料は熱変して茶褐色を呈し、発泡する。

〔備考〕64~69は飛雲と思われる断片である。これらには奥行きの浅いもの(63・64)、立体感のある奥行きの深いもの(65・66)があるが、壁面近く張り付くような部分と、前に大きく張り出す部分とがあったのである。奥行きの深いものにも塑形の施されない面があり、一方向からの視線にあわせたものであろう。これらの雲は金地に彩色が施されていてとみられ、仕上げの入念さとともに、聖なる雲としての表現が注目される。(瀬山里志)

72 箱形天蓋

〔遺物番号〕11A96・2720+11A96・2809

第14図

〔法量〕全高 8.8cm 最大張 13.3cm 最大奥 3.8cm

〔形状・彩色〕天蓋の葺返しと飾幕、およびその下のカーテン状の垂幕の一部。葺返しは飾幕に対して約150度の角度で迫り出す。葺返しの上縁は約45度、隅は約100度の後角となる。表面に白色下地に濃褐色の彩色痕が残る。葺返しには唐草文、飾幕には三角文があらわされる。文様の縁は淡赤色に滲む。

〔構造〕塑土は3層で、下土は1cm前後の蘿スサを多く混ぜた粗い土、中土は微細な孔の残る(スサの焼失痕か)比較的細かい土、仕上土は緻密な土である。下土で概形を造り、これに中土を0.5cm前後の厚みに、仕上土を0.2cm前後の厚みにそれぞれ盛って、白色下地を塗って彩色を行う。以下の箱形天蓋

の断片(73~79)も同様の構造を示す。

〔備考〕72~79は、箱形天蓋とその下のカーテン状垂幕の断片と思われる。出土しているのは、天蓋の葺返しとその下の飾幕、および隅部分で括られるカーテン状の垂幕である。葺返しには唐草文が描かれ、その下の飾幕との間には、境界の帶(現在彩色消失)が設けられる。飾幕には三角文・襞列帯が描かれる。その下のカーテン状垂幕は、上より团花文帯、無文帯で構成される。

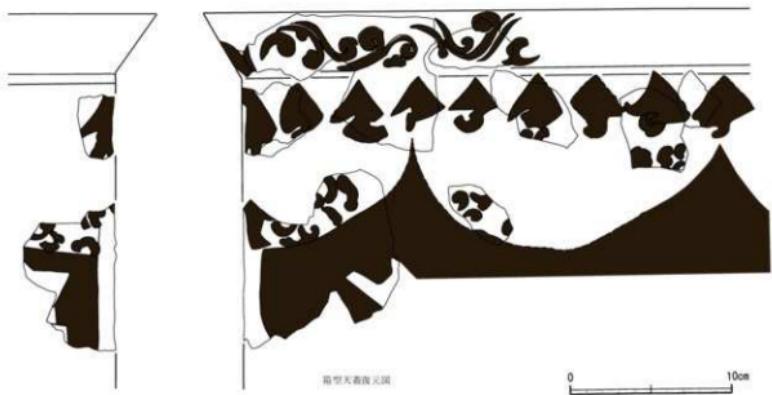
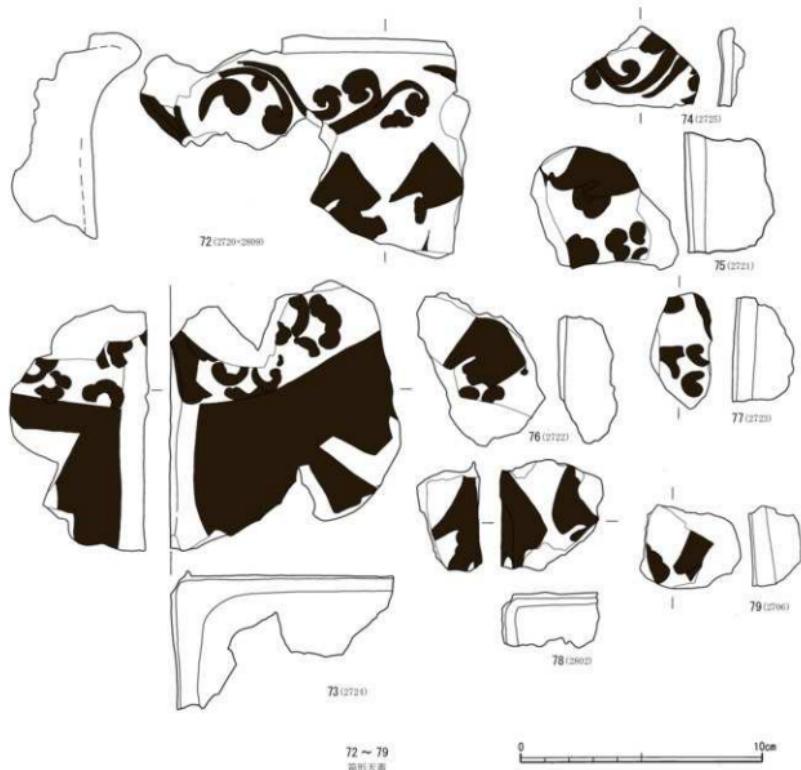
現在、白色下地に濃褐色の彩色痕が残るが、火を被って多くの彩色が失われているものと思われる。現状から文様を推測する場合には、注意を要する。例えば、襞列の表の彩色は残るが、逆三角形の垂幕列や襞列の裏の彩色は失われて、現状では白色の下地をあらわしているものと推定される。濃褐色の三角形は、もとは逆三角形の垂幕列の間から覗く襞列をあらわした部分であり、底辺の不整形な縁り込みが襞褶の折り畳みであると考えられる。箱形天蓋の例としては、法隆寺金堂中の間・西の間の天蓋(7世紀後半)や法隆寺橘夫人念佛厨子の天蓋(7世紀末~8世紀初)が知られる。これらは上下2段の葺返しを備えるが、その下段葺返し以下が、これらの天蓋残存部に該当する。前記法隆寺の諸天蓋の下段葺返し以下の部分は、上から葺返し(唐草文)・細い境界帯・飾幕(鱗形2段、逆三角形・襞列)の順で構成されているが、本天蓋では、飾幕のうち鱗形の部分が省略され、その分丈が低いものと考えられる。71で測ると、葺返しの高さは約3.4cm、飾幕の高さは約2.9cmである。(瀬山里志)

73 箱形天蓋

〔遺物番号〕11A96・2724 第14図

〔法量〕全高 10.6cm 最大張 9.1cm 最大奥 5.7cm

〔形状・彩色〕天蓋下のカーテン状の垂幕の隅部分。隅はほぼ直角で、隅をはさんだ2平面は灰白色下地に濃褐色の彩色痕が残る。その2面の文様構成は同一である。カーテン状垂幕の上半部は团花文帯で、团花文は先端に扇状花を置く十字構造と思われる。



第14図 山王廃寺の塑像（箱形天蓋）

その下半部は平塗りの無文帶で、隅には各面約0.8cm 幅の縁取りをあらわす。団花纹帶と無文帶の境界は、2面ともほぼ同じ高さで、隅の稜線に対して斜めに弧を描いている。(瀬山里志)

74 箱形天蓋

〔遺物番号〕11A96・2725 第14図

〔法量〕全長 5.2cm 最大張 3.3cm 最大厚 1.4cm

〔形状・彩色〕天蓋の葺返しの一部で、白色下地に濃褐色の唐草文の痕跡が残る。(瀬山里志)

75 箱形天蓋

〔遺物番号〕11A96・2721 第14図

〔法量〕全長 6.6cm 最大張 4.9cm 最大厚 3.8cm

〔形状・彩色〕天蓋の飾幕の下部と、その下のカーテン状垂幕の一部。白色下地に濃褐色の彩色痕が残る。飾幕には三角文と襞、カーテン状垂幕には団花纹の一部が残る。(瀬山里志)

76 箱形天蓋

〔遺物番号〕11A96・2722 第14回

〔法量〕全長 6.4cm 最大張 4.4cm 最大厚 2.7cm

〔形状・彩色〕天蓋の飾幕の下部と、その下のカーテン状垂幕の一部。白色下地に濃褐色の彩色痕が残る。飾幕には三角文と襞、カーテン状垂幕には団花纹の一部が残る。(瀬山里志)

77 箱形天蓋

〔遺物番号〕11A96・2723 第14図

〔法量〕全長 4.5cm 最大張 2.5cm 最大厚 2.5cm

〔形状・彩色〕カーテン状垂幕の団花纹帶の一部。白色下地に濃褐色の団花纹の一部が残る。(瀬山里志)

78 箱形天蓋

〔遺物番号〕11A96・2802 第14図

〔法量〕全長 4.7cm 最大張 4.2cm 最大奥 2.3cm

〔形状・彩色〕天蓋の飾幕の隅部分。白色下地に濃褐色の彩色痕が残り、三角文・襞をあらわす。(瀬山

里志)

79 箱形天蓋

〔遺物番号〕11A96・2706 第14図

〔法量〕全長 3.9cm 最大張 3.7cm 最大厚 2.4cm

〔形状・彩色〕天蓋の飾幕と、その下のカーテン状垂幕の一部。白色下地に濃褐色の彩色痕が残り、三角文・襞をあらわす。(瀬山里志)

80 山岳頂部

〔遺物番号〕11A96・2767 第15図

〔法量〕全高 18.6cm 最大張 14.0cm 最大奥 6.9cm

〔形状〕側面に山襞を数段重ねた細長い山岳の頂部。前面、背面ともに仕上げる。

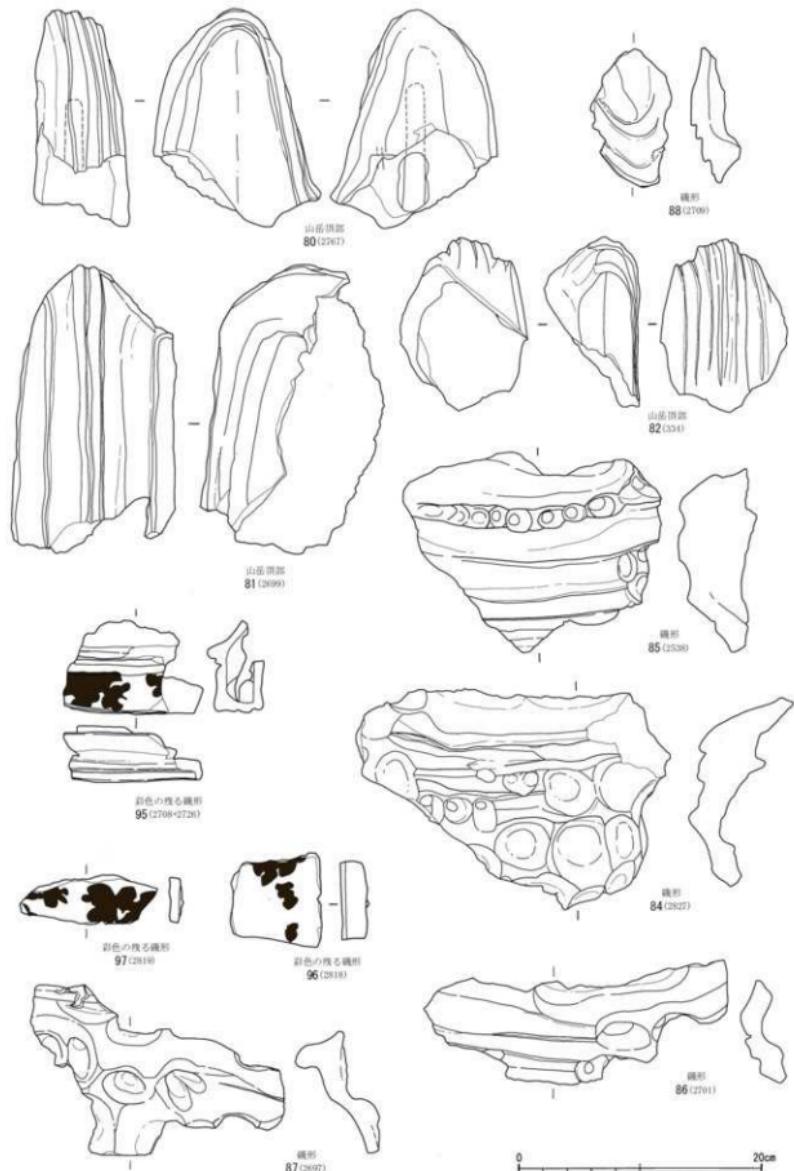
〔構造〕内部中央に心が通っていたとみられる丸い孔(径 1.8cm、下端からの深さ 11.0cm)がある。円孔の内面には紐などの痕跡は確認できない。塑土は下土、仕上土の順に盛る。下土は長めの切葉のスサを混ぜた、小石混じりの極めて粗い土である。仕上土は砂混じりの土で、断面にピンホールが多数みられ、スサとして細かい植物繊維を混ぜていたとみられる。製作工程はまず心に下土を付け、山襞の一部を含めて山容の概形を造る。次に仕上土を厚めに盛って山襞の細部を塑形する。この断片では下土の段階で、肉付けの少なかった側に仕上土を厚く付け足して山容を整えている。表面には彩色の下地とみられる白色を呈する顔料が残存する。(松田誠一郎)

81 山岳頂部

〔遺物番号〕11A96・2699 第15図

〔法量〕全高 23.8cm 最大張 13.7cm 最大奥 14.3cm

〔形状〕山襞を前後に重ねた山岳の頂部、向かって左側の半分。前面、背面ともに仕上げる。稜線は垂直に切り立ち、半U字形の輪郭を呈する。山の稜線を挟んだ前後の部分には造りに精粗がある。奥行きが大きく山襞を明瞭にあらわした側が前面に当たるとみられる。



第15図 山王庵寺の塑像（山岳、鏡形）

〔構造〕塑土は2層。下土は藁スサを混ぜた、小石混じりの粗い土。仕上土は0.3~1.0cmの厚みに盛り、山襞などを塑形する。表面は白色の下地の上に、濃灰色を呈する顔料が部分的に残存する。(松田誠一郎)

82 山岳頂部

〔遺物番号〕9A80・334 第15図

〔法量〕全高14.0cm 最大張10.4cm 最大奥7.0cm

〔形状〕山襞を前後に重ねた山岳の頂部。前面、背面ともに仕上げる。片側の面のみ、継に稜線をあらわすが、この面が前面と考えられる。

〔構造〕塑土は2層。下土は藁スサを混ぜた痕跡のある粗い土で、この上に仕上土を盛って山襞などを塑形する。表面は一面に白色の下地が残り、その上の諸所に黒色ないし褐色を呈する顔料が残存する。
(松田誠一郎)

84 碓形

〔遺物番号〕11A96・2827 第15図

〔法量〕全高14.9cm 最大張25.4cm 最大奥14.5cm

〔形状〕上面が平らな崖の一部。側面上部には横方向の層理をあらわし、下方に横に並んだ浅い窪み(直径4.0cm前後)を造る。上面部には孔2(その1=0.2cm×0.7cm、深さ1.5cm、その2=0.5cm×0.2cm)があく。銅心などを挿した孔とみられ、樹木などを立てた可能性が考えられる。

〔構造〕塑土は、仕上土層の裏面に、藁スサを混ぜた痕跡のある粗い下土が付着して残る。表面は全面に白色の下地が残り、その上の諸所に黒色ないし赤褐色を呈する顔料が残る。

〔備考〕山王庵寺出土塑像片の中には、群像の安置空間を造形したとみられる前後に山壁を重ねた山岳、切り立った崖、平らな広い面をもつテーブル状の岩場、斜面などがある。その内、前後に仕上面をもつ山岳の頂部と特定できる断片以外のものを、ここでは「礎形」と総称して扱う。(松田誠一郎)

85 磚形

〔遺物番号〕11A96・2538 第15図

〔法量〕全高16.7cm 最大張21.5cm 最大奥8.1cm

〔形状〕水平方向の層理をあらわした少し前方に迫り出す崖の一部。上方に横一列に数個の窪みを造る。

〔構造〕塑土は、仕上土層の裏面に、藁スサを多く混ぜた痕跡のある粗い下土がわずかに付着して残る。仕上土は2度に分けて盛る。表面は白色を呈する彩色の下地が残る。(松田誠一郎)

86 磚形

〔遺物番号〕11A96・2701 第15図

〔法量〕全高7.0cm 最大張25.0cm 最大奥9.2cm

〔形状〕緩やかに湾曲する切り立った崖の一部。水平方向の層理と2カ所の窪みをあらわす。

〔構造〕塑土は2層。下土は切藁スサの痕跡が残る粗い土で、仕上土層の裏面に付着してわずかに残る。下土の段階で岩の概形をあらわし、仕上土で水平方向の層理や窪みを造形する。表面は彩色の下地とみられる白色の地が残る。(松田誠一郎)

87 磚形

〔遺物番号〕11A96・2697 第15図

〔法量〕全高7.9cm 最大張23.0cm 最大奥12.9cm

〔形状〕窪み数箇をあらわした、迫り出した崖の一部。

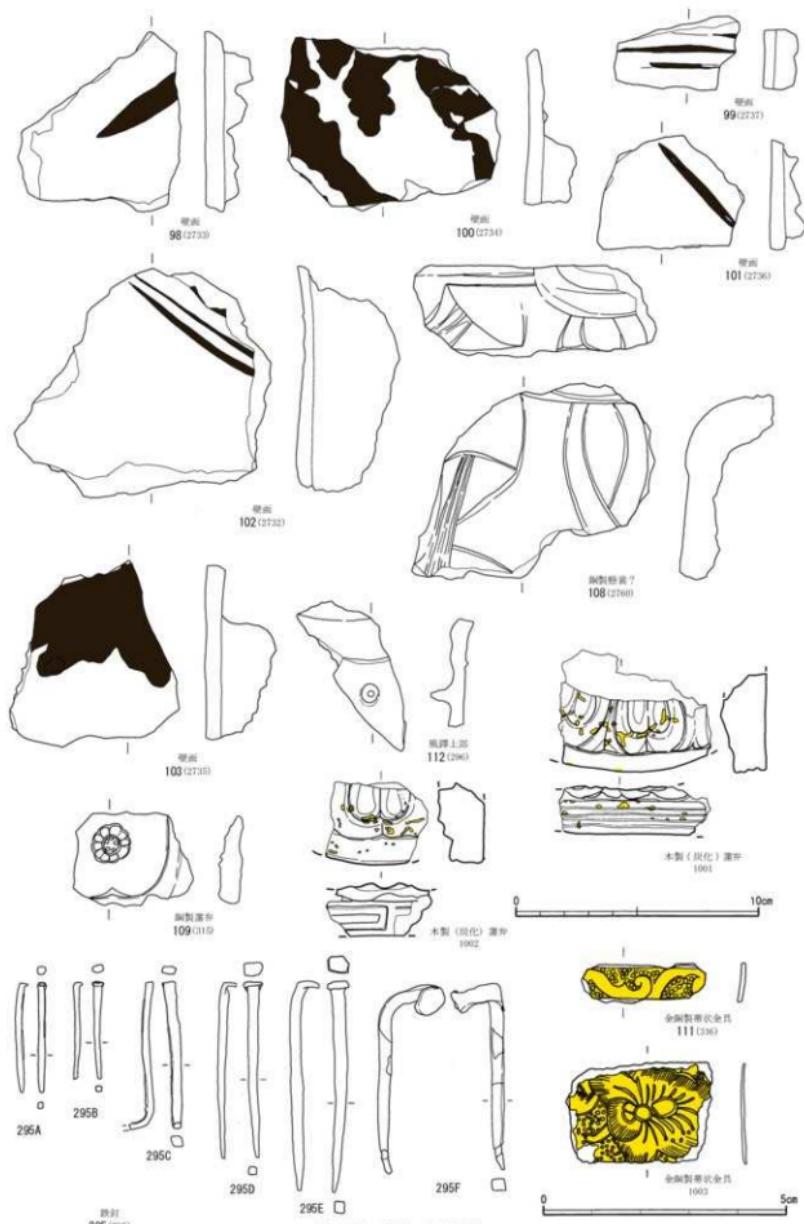
〔構造〕仕上土層の裏面に、藁スサの混じった粗い土の痕跡が残る。仕上土の断面には植物纖維の焼失痕とみられるピンホールがあく。表面は一面に白色的彩色下地が残る。(松田誠一郎)

88 磚形

〔遺物番号〕11A96・2709 第15図

〔法量〕全高3.6cm 最大張11.4cm 最大奥7.9cm

〔形状〕浅いU字形の段差5をあらわす斜面の一部。段差の縁は鋭角的に鋭く仕上げられる。表面及び裏面にも仕上面がまわる。前方に迫り出した平らな岩の縁、または山岳の頂部とみられる。最も手前側の



第16図 壁画、金属製品

段差の面には縦に棱線が1条あらわされる。

〔構造〕塑土は2層。木心があたっていたとみられる下土の内面は、浅く窪み、炭化して黒ずむ。表面は山襞の窪みなどに白色の彩色下地が残存する。(松田誠一郎)

95 彩色の残る礎形

〔遺物番号〕11A96・2708+11A96・2726

第15図

〔法量〕全高10.5cm 最大張11.7cm 最大奥4.7cm

〔形状〕浅いU字形の断面をもつ礎形の一部とみられる断片。中央に帯状の平らな面があり、その両側に層理を2条ずつあらわす。

〔構造〕仕上土層の裏面に、藁スサを混ぜた痕跡のある粗い土が付着して残存する。下土の段階で概形を造り、帯状部分や層理などの細部は仕上土を1.0~3.0cmの厚さに盛って造形する。表面には全面に白色の下地が残る。平らな帯状部分には、暗紫色を呈する粒子の粗い顔料で不定形な模様が描かれる。暗紫色の顔料には橙色にみえる部分があり、丹(四酸化三鉛)の変色の可能性が考えられる。(瀬山里志)

96 彩色の残る礎形

〔遺物番号〕11A96・2818 第15図

〔法量〕全長7.5cm 最大張7.4cm 厚2.2cm

〔形状〕平らな面にまだら状に彩色の残る断片。

〔構造〕仕上土層の裏面に藁スサを混ぜた痕跡のある下土がわずかに付着して残存する。表面は白色の下地に、暗紫色を呈する顔料で不定形な模様が描かれる。断面でみると仕上土層と白色下地層の境目付近が激しく発泡する。

〔備考〕彩色の残る礎形(11A96・2708+11A96・2726、95)の帯状部分と表面の顔料の状態が類似する。(瀬山里志)

97 彩色の残る礎形

〔遺物番号〕11A96・2819 第15図

〔法量〕全長11.3cm 最大張4.2cm 厚1.3cm

〔形状〕平らな面にまだら状に彩色の残る断片。

〔構造〕残存する塑土は2層。下土は2.0cm以上の切藁を含む粗い土である。仕上土の断面には細かい植物繊維の焼失痕とみられるピンホールがあく。表面は白色の下地に黒色を呈する顔料で不定形な模様が描かれる。その周囲の白色下地は赤味を帯びる。断面でみると仕上土層と白色下地層の境目付近が激しく発泡する。

〔備考〕現状では付着する顔料の色は異なるが、不定形の彩色痕や塑土の状態は、彩色の残る礎形(11A96・2708+11A96・2726、11A96・2818、95、96)と共に通する。(瀬山里志)

98 壁画

〔遺物番号〕11A96・2733 第16図

〔法量〕縦7.3cm 横6.7cm 最大厚4.2cm

〔形状・彩色〕暗灰色の筆の葉形の彩色が残る。

〔構造〕残存する壁土は2層。下層の土は、長い藁スサを大量に混ぜた粗い土である。仕上土は緻密な篠土で、0.5cm前後の厚みに均一に盛られる。表面には白土を塗り、彩色の下地とする。以下の壁画の断片(99~103)も同様の構造を示す。(瀬山里志)

99 壁画

〔遺物番号〕11A96・2737 第16図

〔法量〕縦3.1cm 横5.2cm 最大厚1.5cm

〔形状・彩色〕黒色の直線2条が引かれる。

〔構造〕壁体は下層の土がほとんど残らず、仕上土だけが残存する。他の壁画断片に比べ、仕上土が厚めである。(瀬山里志)

100 壁画

〔遺物番号〕11A96・2734 第16図

〔法量〕縦7.5cm 横9.7cm 最大厚2.8cm

〔形状・彩色〕赤褐色の彩色が残るが図様不明。

〔構造〕壁体の下層の土には、2.5~4.0cmの長い藁スサが大量に混ぜられる。(瀬山里志)

101 壁画

〔遺物番号〕 11A96・2736 第16図

〔法量〕 縦 6.2cm 横 4.6cm 最大厚 1.7cm

〔形状・彩色〕 茶色の直線 2条が描かれる。(瀬山里志)

102 壁画

〔遺物番号〕 11A96・2732 第16図

〔法量〕 縦 10.0cm 横 9.6cm 最大厚 4.4cm

〔形状・彩色〕 茶色の直線 2条が認められる。

〔構造〕 他の壁画断片に比べ、表層の土に薙スサが多く含まれ、粗い肌合いをみせる。(瀬山里志)

103 壁画

〔遺物番号〕 11A96・2735 第16図

〔法量〕 縦 7.2cm 横 6.9cm 最大厚 3.8cm

〔形状・彩色〕 黒褐色物質が飛沫のように散るが、國様不明。

〔備考〕 98~103は白下地の上に何かを描いたような痕跡があり、壁画としたが、主題やモチーフについては不明である。壁面の仕上げも粗く、精緻な絵画を描くには不向きであるように思われる。これらが壁画であるのか、今後の発掘成果も期待しつつ後考に俟ちたい。(瀬山里志)

108 銅製懸裳?

〔遺物番号〕 11A96・2760 第16図

〔法量〕 全高 8.1cm 最大張 10.5cm 最大奥 3.8cm
銅厚(上端) 1.0~1.5cm 同(前面下端) 0.5~1.0cm
同(左側面下端) 2.1cm 重量 483g

〔形状・構造〕 如来坐像または菩薩坐像の懸裳の右上隅の部分か。銅製で、火中のため、表面は荒れる。衣縁または衣文とみられる浅い段差に沿って、縁取線 1条を鏽刻(せんこく)する。隅の部分には袋状の折り畳みをあらわす。上面には緩い立ち上がりがある。裏面は概ね表面の造形に沿って窪む。

〔備考〕 懸裳の可能性があるが、上面の立ち上がりは坐像の膝とみるには緩やかに過ぎるくらいがある。

部位の特定については、なお検討を要する。(松田妙子)

109 銅製蓮弁

〔遺物番号〕 9A80・315 第16図

〔法量〕 全長 4.0cm 最大張 5.1cm 厚 1.0cm

〔形状・構造〕 仏像の台座蓮弁とみられる断片。銅製で、火中のため、表面は荒れる。全体に浅く湾曲する。仰蓮か反花かは不明。蓮弁の中央に菊座 1箇がある。その中心は窪み、宝石やガラスなどを嵌めていたとみられる。裏面は概ね表面の造形に沿って窪む。

〔備考〕 台座蓮弁に菊座をあらわす例は、長崎県対馬市黒瀬觀音堂銅造如來坐像(8世紀)など、統一新羅の遺品に多くみられる。日本では薬師寺東院堂銅造聖觀音菩薩立像(7世紀末~8世紀初)の台座反花に同様の例がみられるが、その作例は多くない。(松田妙子)

111 金銅製帶状金具

〔遺物番号〕 9A80・316 第16図

〔法量〕 全長 2.6cm 幅 0.8cm 厚 0.08cm

重さ 0.8g

〔形状・構造〕 両端が欠損する帯状金具の一部で、上下縁にも欠損が多い。銅製鍍金で、上下縁近くに陰刻の縁取線を入れ、その間に波状唐草を陰刻する。唐草の地には魚々子を打つ。唐草は縁取線をはみ出し、魚々子もあまり精緻ではない。

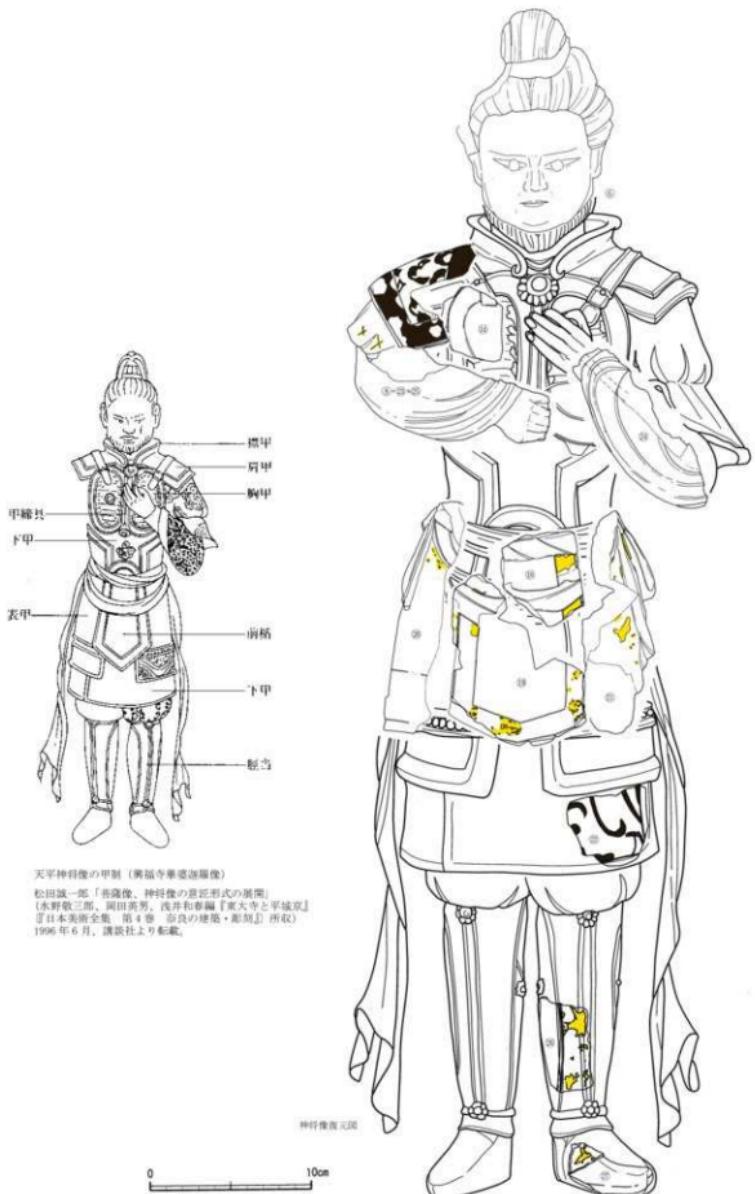
〔備考〕 廉子や献物台などの飾金具であろうか。極めて簡略な蔽手唐草であり、これから年代などを推定するのは難しい。(瀬山里志)

112 風鐸上部

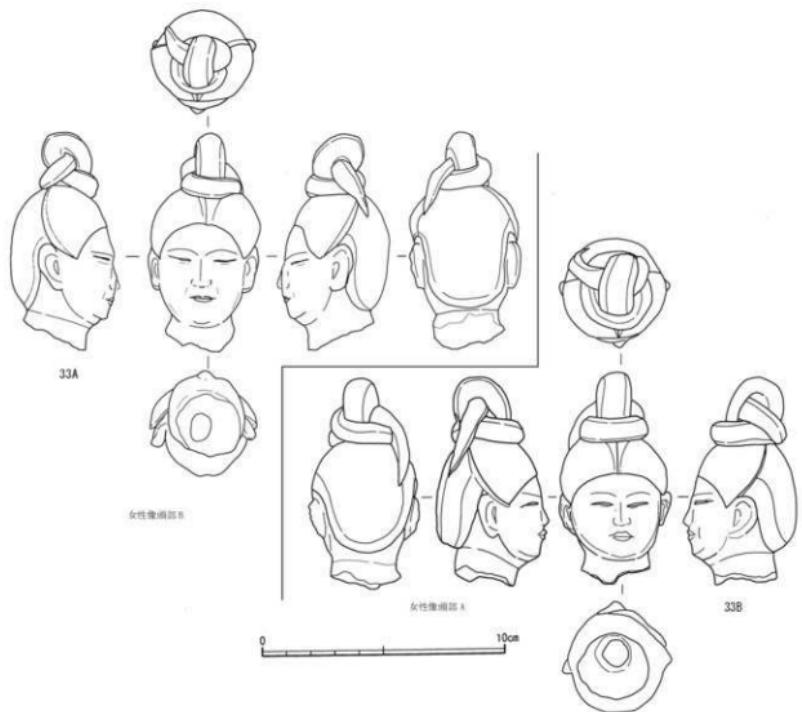
〔遺物番号〕 9A80・296 第16図

〔法量〕 全高 3.5cm 最大張 3.0cm 厚 0.6cm

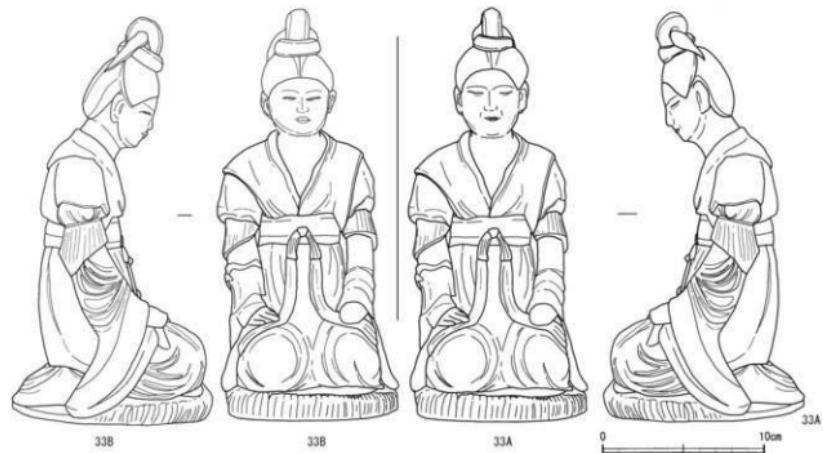
〔形状・構造〕 風鐸上端部の断片。舞から鐸身側面 上部にかけての部分で、乳(径 0.7cm、高 0.9cm) 1個が残存する。銅製で、火中のため、表面は荒れ



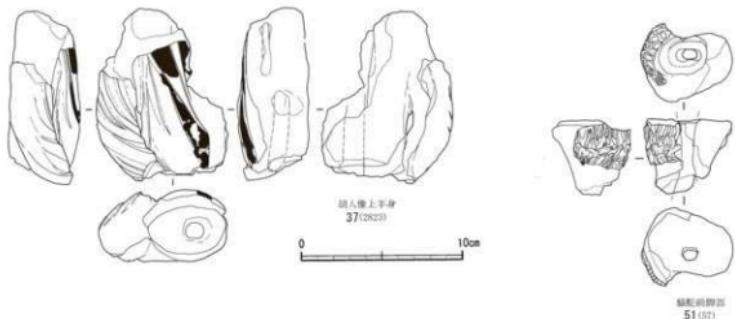
第17図 神将像復元図



女性像復元図



第18図 女性像A、Bの推定復元図



第19図 胡人像と駱駝像の推定復元図

る。

〔備考〕9A80・297、9A80・298の銅製品はこの断片と関連するか。(松田誠一郎)

295 鉄釘 第16図

A〔遺物番号〕9A80・295

B〔遺物番号〕9A80・295

C〔遺物番号〕9A80・295

D〔遺物番号〕9A80・295

E〔遺物番号〕9A80・295

〔法量〕

A長さ 4.6cm、幅2mm、重さ2.1g

B最大長4.0cm、幅2mm、重さ1.9g

C最大長6.0cm、幅4mm、重さ6.0g

D長さ 7.7cm、幅4mm、重さ 6.6g

E長さ 8.6cm、幅5mm、重さ13.8g

F最大長7.7cm 幅5mm、重さ 20.8g

〔形状・構造〕A~Fの6点の鉄釘を図化した。いずれも折頭釘で、上端を叩きのばし、直角に折って釘頭とし、身部の断面形状は方形。若干下端を欠損するもののはほぼ完形。大型・中型・小型の別がある。(文化財保護課)

1001・1002 木製蓮華座 第16図

〔法量〕

1001 幅6.3cm、奥行4.9cm、厚2.0cm

1002 幅4.0cm、奥行3.4cm、厚2.1cm

〔形状・構造〕昭和49年度に実施された第1次調査にて、塔心礎の北東150mほどの場所で出土。1001・1002は同一個体で、炭化した小型の木製蓮華座である。上面円形を呈し、反花と框の二段が確認できる。框は横位区画と「コ」字状区画あり、数単位の方形区画構成と見られる。全体的に金箔が残存し、一部断面に及ぶものは被熱の影響で挿入されたものか。(文化財保護課)

1003 金銅製飾金具 第16図

〔法量〕最大長3.0cm、最大幅2.1cm、厚0.5mm、

重さ2.7g

〔形状・構造〕飾金具の一部である。銅製鍍金で、宝相華文を陰刻し、地には魚々子を打つ。(文化財保護課)

神将像復元図 第17図

6の神将像頭部、8+21+25の神将像の拳、腕、肩、14の神将像胸当、24の神将像腕、19の前橋、20・21の表甲、26の脛当、27の沓をもとに復元図の作成を行った。ベースは興福寺八部衆毘婆迦羅をモデルとした。神将像復元高は70cmである。(文化財保護課)

女性像復元図 第18図

33A(前橋市蔵)の女性像頭部と33B(個人蔵)の女性像頭部をもとに推定復元図を作成した。33A・33Bともに復元高25cmである。なお、体部については法隆寺五重塔初層塔本塑像、東面維摩詰像土侍者像(東13)をモデルに描き起こした。(文化財保護課)

胡人像と駱駝像の推定復元図 第19図

37の胡人像上半像と51の駱駝前脚部をもとに推定復元図を作成した。胡人像復元高33cm、駱駝像復元高43cmである。モデルは慶城県博物館蔵の中国甘肃省慶城県穆泰墓出土の加彩牽駝俑と加彩駱駝(唐開元18年(730))をモデルとした。

5 おわりに

塑像解説については、松田誠一郎ほか『山王庵寺～山王庵寺等Ⅴ遺跡発掘調査報告書～』前橋市埋蔵文化財発掘調査団、平成12年(2000)3月から転載したが、研究の進展による成果を松田誠一郎が加筆・修正を行った。(文化財保護課)

あとがき

令和元年度は、世界遺産であるノートルダム大型堂や首里城の火災、東日本台風（19号）による各地の被害など、文化財にとって災いの多い年でもありました。加えて新型コロナウイルス感染症の拡大等による文化的な行事の延期、中止など様々な出来事がありました。

我々の業務であり、我々の使命は、人々がこれまで賞んできた悠久の歴史を、その足跡を調査し、ふたたび光をあて、守るべき文化をつがなく後世に伝え残してゆくことです。

毎年刊行しているこの年報の編集作業は、この1年で本市文化財保護課が積み上げてきたものを見つめ直し、改めて顧みる機会となります。

達成感、反省、感謝、様々な感慨が湧き上がってきます。

次はどのような思いで1年を振り返ることになるでしょうか。充足感をもって次号が刊行できるよう、精一杯業務に取り組んで参りたいと思っております。

令和2年3月

文化財保護課長 田中 隆夫

令和元年度

前橋市文化財調査委員

（敬称略・氏名五十音順）

岡田 昭二

能登 健

右島 和夫

村田 敬一



年報 第50集 令和元年度文化財調査報告書
令和2年3月
発行 前橋市教育委員会事務局 文化財保護課
前橋市総社町三丁目11-4

令和元年度

文化財保護課職員

課長 田中 隆夫

文化財保護係

係長 大野 裕史

副主幹 江黒 啓一

リ 吉田 和夫

リ 小川 卓也

リ 奥山 武

主査 相川 修司

主任 本館 美保

リ 橋山 知美

リ 宮川 親紀

専門員 小島 純一

嘱託員 前原 豊

埋蔵文化財係

課長補佐兼係長 神宮 聰

副主幹 岩丸 展久

リ 松村 郷敏

リ 藤井賢一郎

リ 並木 史人

リ 小峰 篤

リ 阿久澤智和

主任 寺内 勝彦

主任 斎藤 風

学芸員 村越 純子

専門員 梅澤 克典